



始



テト 1F-38

275-64



文學士 野田義夫著

新時代の德育

東京

會社

弘道館發兌

大正  
10. 1. 21  
内交



はしがき

本書は丁酉倫理會倫理講演集に掲載した四篇の論文を訂正増補して、之に緒論と結論とを書き加へたものである。

四篇の論文は一度に書いたものでも無く又豫定の計畫に基いて起草したもので無いから内容の聯絡が不十分であり、重複の箇所があるのみならず、口語の敬體と常體と一致せぬ所があることは著者も十分に自覺して居るので平に讀者諸君の寛容を請ふのである。

大正十年壹月

野田義夫識す。

序

一

# 新時代の德育

## 目次

### 緒論

### 第一章 新時代と民族的自覺……………二

#### 一 時勢と民族的自覺……………一

#### 二 民族的自覺の要素……………三七

第一 同族意識

第二 同國意識

第三 國語意識

第四 同一文化の意識

第五 民族自己價値の意識

目次

第六 民族連帶責任の意識

三 民族的自覺と人道……………八〇

四 愛國心の心理……………九九

五 愛國心の教養……………一〇七

第二章 人道と國民道德……………一一一

一 人道及び國民道德の意義……………一一一

二 文化と道德……………一一六

三 人道の基礎及び具體化……………一二八

四 道德の進歩と人道……………一三六

五 國民道德と人道……………一四三

六 我國國民道德の特色……………一六四

七 國民道德に關する誤解……………一八三

第三章 新時代と修身教授……………一九二

一 修身教授の現状……………一九二

二 修身科の任務と誤りたる期待……………二〇九

三 修身教授の方法……………二三〇

知的陶冶の偏重

教科書の取扱方

講讀—講義—補説

例話

教科書の活用—生徒の理會

四 生徒思想の指導……………二六四

五 修身科に對する生徒の感想及び要求……………二九二

六 生徒の誤解……………三二六

七 學校の種類と修身科……………三三二

八 修身科の教師……………三三〇

### 第四章 新時代と性格訓練……………三五五

一 新時代の訓練……………三五五

二 性格の理想の改造……………三六三

三 性格訓練方法の改造……………三八六

結 論……………四一九

## 目次終

# 新時代の徳育

野田義夫 著

### 緒論

毎年梅雨の季節には誰しも豫め多少の霖雨を待ち受けて居る。霖雨が長引けば洪水が出る。洪水が出ればあたりの田や畑をひたす。洪水の度毎に豊かな肥料を残して行くやうな地方では、或る程度まで洪水を待ち構へて居るのみならず、衷心其の餘澤に感謝して居る。水害の虞ある大河の沿岸では、一重二重の堅牢な堤防を築いて居る上に成るべく小高い土地を選んで住宅を建て、石垣を積んだ上に土

緒論

一

藏を造るやら、萬一の場合に舟を備ふるやら、夫れく、洪水の準備が出来て居る。又過去幾百千年の経験によつて非常の場合に處する訓練も出来て居れば、古老の言ひ傳へなども心得て居る。それで普通の洪水は此等の準備で何とか災害を切り抜けて行かれるのである。併し此長雨が豫期に反して例年になく法外に劇しく又法外に長く續いたとしたら如何であらう。暴雨とか豪雨とか猛雨とか疾雨とか急雨とか劇雨とか言ふやうな、有りふれた熟語では形容の出来ぬ程の降り方で、而も夫が竝大抵の三日や四日で無く、十日も二十日も降り續いたら如何であらうか。日を逐うて時々刻々に増し来る水量は彌が上に嵩んで、今か今かと日夜氣を揉んで見張つて居る村民の膽を潰ぶし、さしもの堤防を溢れ出でて、見渡す限りの田野は滔々たる濁流の海となつて、仕舞ふであらう。數十年未だ嘗て浸水した事の無い家までが思も

よらぬ憂目を見ねばならぬ。さて洪水の災難を夢露も待ち設けぬものが今更の如く周章狼狽するのは當然の事であるけれども、兼ねて洪水の覺悟あり準備あり心得あるものでも、前代未聞の大洪水に出遇つては容易く其災難を切り抜ける事は出来ぬ。二階ならば大丈夫と思つて安心して居ても床は愚か二階までも屋根裏までも次第に侵入する濁水に沈んで、遂には家諸共に押し流されて仕舞ふ事がある。遂に避難の路を失つて數人の家族が悲酸な最後を遂げるものもある。堤防に弱點があれば何時の間にか激流に突き破られて一瀉千里の水勢であたりの田地を洗ひ流して仕舞ふのである。大洪水の退いた跡は洶に慘憺たる状況である。幾十百町の田地は土砂をかぶつて不毛の地となる。累代の財産を失ふものがある。其日の生活に窮するものが出来る。地主と小作人との間に面倒な問題が生ずる。大水害の後

は社會の事情が一變して仕舞ふのである。それはさて置き、とも角も第二の洪水の豫防として第一に着手すべき事は破壊された堤防の改造である。誰しも今後如何なる大洪水が來ても崩潰せぬやうな堅固な堤防を作ること望むであらう。元の場所に前より一層堅固な堤防を作るのも一案であるけれども激流が土地を荒した跡を稽へ、今日の水勢を研究して水路の迂回した所を真直にし或は新に放水路を開き又は河底を浚渫して水流の抵抗を少くして水はきをよくするやうな改修工事も一層根本的の改造である。堤防の改造には色々の見地から研究に研究を重ねる餘地があるのである。堤防の改造のみならず洪水に對する準備や豫防や心得やに就いて幾多の改造が行はれねばならぬ。土砂で荒された水田の復舊工事にも多大の勞力を要するであらう。水害の程度では土地の産業にも生活状態にも富の分配に

も大變動を生ずるであらう。

最近四箇年餘の久しきに亙つた歐洲大戰後の狀況は他に類例を求めたならば、上に述べた大水害後の光景に彷彿たるものがあると思ふ。大戰其物の慘害と其後に起つた世界改造問題を大洪水に比べて兩々對照して考ふれば無量の興味と感慨とが自然に湧き出づるのである。大洪水は人心を一變する如く大戰も亦人類の思想史に一新紀元を劃するのである。大洪水は或る程度まで社會を改造する如く、大戰は世界の改造を喚び起した。人類は如何なる境遇に出遇つても之に適應して一層幸福なる生活状態を作り出さうと努力して已まぬのは人心の奥底に深く根強く具はつて居る自然の要求である。歐洲大戰が人類に及ぼした慘害や交戦國民に要求した必死の努力や艱難辛苦は生活問題や經濟組織社會組織乃至政治組織に就いて從來よりも一層立



入つて最も深刻な考察を下さしむるやうになつた。此の深刻な考察は根強い自覺を促して遂に世界の思想界に種々の難題を惹起した。世界の人類は申し合せたやうに或る程度まで共通の要求を提出して急轉直下の勢を以て思想界の大潮流を作り出した。是が所謂現代思潮の要求である。現代思潮の要求の根柢には人類が開明の域に向つて以來人智の限りを盡して文化の發達を圖り人類の幸福を増進せんとした努力と同一の努力が横はつて居ると思ふ。今日まで少しづつ實現されて居つた理想を一氣呵成に實現せんとするのである。今日まで疾くに實現されて居る筈の事を急いで實現せんと努むるのである。自分は之を現代思潮の正流と認むるのである。獨逸帝國の滅亡、埃洪國の分裂露西亞帝國の瓦解は言ふ迄も無く歐洲戰亂が行つた大破壊である。之と同時に多年強國の壓迫に苦んで居た民族が年來の

宿望を達して獨立を完うしたのもある。此等の諸國に於ける社會の改造や思想の變動は勿論のと今日では世界の如何なる國にも改造や解放の叫びや運動が人心を動かして居らぬ所は無いのである。世界大戰以前には假令實行を企てても因襲や舊思想に囚はれて容易に實行し得なかつた革新や改善が世界の大部分に押されて急轉直下の勢で決行されて居るものがある。多年の懸案として智者識者の頭腦を悩まして居つた難問題が一朝にして造作無く解決したのもある。此等は時勢の然らしむる所である。戦後社會劇變の結果得意の順調に乗じて揚々たるものあれば、失意の悲境に沈んで居るものもある。とも角も社會の各階級に於ける富や名譽や權勢や吉凶禍福の分配の標準が著しく變動して來た。社會を動かす實力の中心が何時の間にか移動し始めた事は何人も承認する所であらう。昔し鼻高々と幅を利

かした連中が今日では遠慮して屏息せねばならず、昔は尊敬された人が今日は却つて輕侮の念を以て迎へられるものもある。要するに人間の社會上の地位や評價の標準が變動して、幾多の新しい社會問題が猛烈の勢を以て擡頭して來たが、さて快刀亂麻を斷つゝの概ある解決は不幸にして今日まではまだ如何なる國にも出來て居らぬやうである。併しながら大局に著眼して觀察して見れば、世界の大勢の趨く所は或る程度まで現代思潮の要求を充たして、多少とても人道主義を實現して、人類全體の幸福の増進に歩武を進めつゝあることを承認せねばならぬと思ふ。自分は人類社會の文化は大體進歩しつゝあるものと認むる。此點に於ては自分は時勢の趨向を樂觀するものである。併しながら現代思潮の趨勢を以て徹頭徹尾健全と見、自然の進歩と考ふるものでは無い。其一面には社會の秩序を紊し人類の災禍を招くやう

な思想の存在することも掩ふ可らざる事實である。是は生長の盛なる青年にも時々病氣があるやうな類であると思ふ。人間には病氣が絶えぬと同じやうに、不健全な思想は如何なる社會にも如何なる時代にも多少の存在するものである。現代思潮の變動は今迄に無く急劇であるから今日は思想問題に就いて眞面目な研究を要するのである。現在の世界はまだ大水害後の跡仕末が濟んで居らぬ。破壊された堤防の改造がまだ竣工して居らぬ。否改造の方針に就いて議論が一致せぬと言ふ有様である。此跡仕末を完全にすまし適當なる堤防の改造を終る迄には今後眞面目なる研究と熱誠をこめた努力とがまだまだ必要であると思ふ。よしや假りに一步を譲つて此等の跡仕末や堤防の改造が立派に出來上つたとしても眞に將來の大洪水を防ぐには今一つ心を潛め思を致して根本的に考ふ可き事がある。夫は洪水が

出てから後の災害を防ぐよりは洪水の出ぬ前に洪水其物を防ぐ工夫である。是は言ふ迄も無く堤防の改造よりも水源地の山林の手入である。水源地の山林が濫伐されて仕舞へば何程堅固な堤防を作つて置いても決して安心は出来ぬのである。堤防の改造は結局出水後の枝葉の問題で水源地の植林は治水の根本問題である。現今の社會組織の改造や其の他百般の改造問題は洪水に對する堤防改造問題に比すべきものであると思ふ。即ち思想の變動を見かけて起つた問題である。言はば應急の方策である。さらば水源地の植林に比すべき根本的問題は何であらうか。自分は此問に對して民族生存の問題と答へ度いのである。民族の生存其自身が疑はしくなれば其の生活の形式に過ぎぬ社會問題は何等の意義を有せぬやうになつて仕舞ふと思ふのである。社會問題の解決は先づ民族生存の安定を豫想し之を

背景とせねば到底不可能であり無意味のものであると思ふ。民族の生存は川の流にも比すべきである。水源地の山林の手入が行届けば旱天が続いても湧水の憂が無い。長雨が續いても大水害の心配が無い。水源地の植林は洪水に對する最も根本的な而も最も確實な對策である如く、民族の生存を安定ならしむる根本方策にも之と同様の事柄が無ければならぬ。

自分の確信する所によれば人類は民族を單位として始めて生存を完うし其の幸福を増進することを得るものである。凡そ民族の生存には之を生存せしむる生命がなければならぬ。此生命は言ふまでも無く祖先より代々相承して同族の血管を溢流せる民族精神である。此民族精神の手入がやがて水源地の山林の手入に相當する根本方策と言はねばならぬ。此根本方策を忘れて改造問題のみに没頭するも

のは本を忘れて末に走るものである。民族精神は民族生存の生命である。民族精神が旺盛であり其踏む道が正義人道に適へば民族は必ず繁榮する。之に反して民族精神が銷沈して行く可らざる途を行けば民族は衰微せざるを得ぬのである。世界各国の民族精神が一致して旺盛であり均しく正義人道を守れば、人類全體として幸福を増進せねばならぬ。之に反して世界各国の民族精神が孰れも銷沈して正義人道を無視して仕舞へば人類は災を蒙らざるを得ぬのである。若し又正義人道を踏まずして恣に民族精神のみを鼓舞し偏狭なる愛國心が熱烈になれば、假令兵力は強くとも、動もすれば他の民族を侵害し延いて人類の災を招くのである。尙又民族精神が萎靡振はずして只管正義人道のみを唱へても、國際競争の劇烈な今日の狀勢では結局空虚無力なる弱者の聲となり了らんとするのである。斯の如く考ふれば

民族精神を振興して正義人道を踏ましむることは民族を繁榮せしめ人類の幸福を増進する萬全の策と言はねばならぬ。之が即ち世界改造の根本でなければならぬ。又同時に德育の根本でなければならぬ。世界改造の根本を究めずして徒らに枝葉問題に過ぎぬ部分的改造問題のみに没頭して全局面を達観することの出来ぬものは堤防の改造に心を奪はれて水源地の植林を等閑に附すると同様である。枝葉の改造問題を圓滿に解決せんとすれば先づ其の根本問題に手を染めなければならぬ。改造問題も勿論急務である。民族生存の根本問題は更に大切である。

世界改造論の喧しい新時代の今日に於て我邦の德育問題に就いて聊か卑見を述べて見度いと言ふ考を起したのは全く如上の理由に基づくのである。以下各章に述べたる論旨は色々方面は違ふが歸著點は

皆同一である。多少にても同感の諸士に参考とならば著者の幸福は之に過ぎぬのである。

## 第一章 新時代と民族的自覺

### 一、時勢と民族的自覺

茲に民族的自覺と名くるのは民族は各自分の事は自分で處理せねばならぬと言ふ事を理會し覺悟することを言ふのである。個人が誰も自分の事ばかりを考へて其の所屬團體たる民族の運命に就いて全然無自覺無頓着で萬事偶然の成行放題に一任して置くと云ふ事なく、自から進んで民族團體の本質や組織を理會して民族が共同生活を完うして行くには如何なる條件が必要であつて、民族の成員はそれに對して如何にせねばならぬかと言ふことを、各自に自發的に覺悟することである。結局民族の運命は民族自から開拓して行かねばならぬと

言ふことに就いて徹底的に自覺することである。民族の盛衰興亡の責任は決して他に轉嫁すべきものでなくて、民族自から引き受けねばならぬことを自覺するのである。此自覺は當然民族の統一意識を必要とする。民族團體の成員は自己の屬する民族を愛し自己の民族に親しみ民族全體が結合統一して民族の獨立生存と進歩發展を圖らねばならぬのである。約言すれば民族的自覺は民族生活の存亡を左右する生命である。民族にして民族的自覺を缺いたものは生物にして生命なきに等しきものである。民族的自覺は民族心又は民族的精神と名けても宜しい。民族が國家組織の下に共同生活を營んで居る上から言へば國家的精神或は國民的自覺と名けても宜しい。古來普通に愛國心と名づて居るのも其内容は何等本質に於て異なる所が無い。自分は民族的自覺を以て明確なる自覺を有する愛國心と考へたい。

自分は此論文中に時々愛國心と言ふ語を民族的自覺の代へ言葉として同様の意義に用ふることを豫め斷つて置く。愛國心や國家的精神乃至國民精神は随分古い問題である。自分は今茲に此古い問題を提出して今日の時勢の新しい光に照して聊か考察を試みて見度いと思ふ。

我日本人は自からも許し世界の人も驚嘆する如く愛國心強き民族である。即ち強烈なる民族的自覺を有する國民である。是は我國體と民族生活の長い歴史が自然に生み出した所であると思ふけれども其本づく所は民族固有の特性即ち國民性にあると確信する。我國民の愛國心は一種の傳統的愛國心である。併ながら今日の新時代は斯かる傳統的愛國心に信頼し國民性の遺傳に一任して民族の運命延いては自己の一身の運命を樂觀して泰平無事を夢みて居る時代では無

い。傳統的思想は絶對的信仰の力を以て民族を支配して居る間は結構であるけれども、國民が漸く其根據を疑ひ價値を批評するやうになれば一種の懷疑的氣分を生じ民族を動かす力が薄らいで來るのみならず、動もすれば所謂危険性を帯び來るやうになるのである。民族的自覺は本來民族を本位として生じた民族固有のものであるけれども、社會の一角には之に反對して人類の共通性に立ちて民族の差別を撤廢しようとする思想がある。此思想が極端に進んで益々其主義を押しつめて行けば、民族や國家の利害を云々して居るのは畢竟狹隘偏頗な考へであつて、我々は唯自己と人類全體の幸福とを考ふればよいので、毫も其中間に民族や國家の如き團體を考ふる必要は無いと云ふ事に歸着して仕舞ふ。是は所謂人道の理想である。人道の理想は一步を誤れば民族的自覺即ち愛國心に對して懷疑の念を抱かしむる。要

するに傳統的愛國心も民族的自覺も決して固定したもので無い。時代思潮によつて動かされ得るのである。併し自分は懷疑を以て破壊のみとは考へず、建設に進む階段として寧ろ發達進歩の要件と考ふるものである。傳統的愛國心は一旦批評懷疑の階段を通過することがあつても結局根柢あり徹底したる民族的自覺に到達するものであると信ずる。自分は我國民が悉く斯の如き民族的自覺に到達せんことを希望すること極めて切なるものである。併ながら今日既に斯かる民族的自覺に到達して居るものと考ふることは出來ぬ。自分は時勢の推移に鑑みて特に此題を選んだ次第である。

六年前歐洲大戰勃發の當時は國家主義對人道主義、軍國主義對平和主義の議論が我邦の思想界に喧しかつた。戰時中我國では國家主義の色彩が強烈で私かに獨逸の軍國主義の成功に感服し之に嘔歌した

ものが多かつた事は掩ふ可からざる事實であつたと思ふ。之に反して平和克復の後は人道主義の色彩が極めて鮮明となつて平和主義が力を得て來たものと見て差支無らう。前にも一言したる如く人道主義が一步を誤りて極端に走れば國家主義を排斥する。國家主義を排斥すれば其結果は自然に愛國心を排斥し民族的自覺を不必要とするに至るのである。是は固より健全な結論では無い。自分は先づ此點から少し考察を始めて見度いと思ふ。

歐洲大戰は地球上至る所に世界改造の叫を喚び起した。政治の改造、經濟の改造、社會の改造、乃至教育の改造と言ふ聲が思想界に充滿して居る。今日改造を口にせぬものは時代後れの待遇を受けねばならぬ有様である。改造は現代の標語である。時勢の要求である。果して然れば現代は何故斯く改造を要求し又如何なる改造を要求して居

るかと思へて見ねばならぬ。

歐洲大戰が世界改造の叫びを喚び起したものとすれば此兩者の間には深い因果關係が存在して居ることを考へねばならぬ。自分の考ふる所によれば今次の大戰は從來の社會組織の幾多の缺陷を暴露したので、其缺陷は到底其儘に放置して置くことが出來ずに大急ぎに急いで大修繕を行はねばならぬやうになつた。それも姑息の修繕の度合を通り越して根本より改造を叫ばねばならぬやうになつたのである。一體戰爭其物は非常の慘害と不安とを來すものである。此慘害と不安とを除去するには世界の改造を行はねばならぬ。戰爭は無いものとしても社會には幾多の不當不公平のことがあり不満不平の種となり又慘害不安の原因を作つて居る。此等は戰時に於て事態が極めて明瞭となつた。我々は慘害なき生活、不安なき生活即ち安定なる生活、



幸福なる生活を要求する。是は人間の自然に提出する要求で而も極めて正當なる要求である。今次の大戦の如き大災難に遭遇すれば此要求は押へやうとしても押ふる事は出来ぬ。是が世界改造の目標である。個人も社會も戦前より一層高い標準の生活を要求し一層幸福なる社會の實現を期して居る。結局一層高き人道主義の文明社會の建設を期待して居るのである。世界改造の原理として現代を風靡して居る代表的思想は言ふまでもなくデモクラシーの主張である。即ち公正の要求である。自由平等友愛の要求である。自分の考では最も合理的のデモクラシーの主張は人道の理想に合するから改造の目標は人道主義の高潮であると言つて差支無いと思ふ。而も合理的の改造は其目的とし理想とする個人及人類全體の幸福を増進することを得るものと信ずることが出来るのである。けれども自分は一派の

人が主張する如く人道主義は必ずしも國家主義と衝突するもので無いと思ふ。随つて民族的自覺即ち愛國心と矛盾するもので無い。併し人道主義の假面を被つて其實人道主義の本旨に反し自由平等の美名に隠れて其實自由平等の趣旨に反するものがある。無政府主義、共產主義、ボルセビキの如き過激思想である。此等が國家主義に反し愛國心を無視し民族の結束を弱くするとは勿論である。けれども此等の主義の主張通りに社會を改造したならば果して其要求して居る目的が遺憾なく到達せられ、其理想が思ふ通りに實現せらるるであらうか。此等の主義は果して個人及社會の生活を安定ならしむることが出来るか、果して人類全體の幸福を増進することが出来るか。自分は今茲に之を詳論する餘裕を持たぬから、唯一言強い明白な「否」と言ふ結論だけを記して置く。論より證據露西亞の現状は事實によつてよ

く此結論を證明して居るでは無いか。彼等は國民の慘害を除かんと  
して却て國民をして一層甚しき慘害を被らしめ、生活の不安を去らん  
として却つて一層甚しき生活の不安に陥らしめて居るでは無いか。  
壓迫、横暴、專制に反對して自由平等を唱へて居るに拘らず、却て一種の  
壓迫、横暴、專制を強行して自己の宣傳する主義を裏切つて居る。吾々  
は彼等が標榜する人道主義の假面や自由平等の美名に誘惑されては  
ならぬのである。合理的の人道主義が民族的自覺と矛盾せぬことは  
勿論合理的の自由平等主義は民族生活と衝突する筈は無いのである。  
唯誤りたる人道主義や誤りたる自由平等主義に囚はれたものが民族  
主義國家主義を危くせんとするのである。

あらゆる民族あらゆる國家の境界を撤廢して人類全體を以て一團  
體とし、自由平等四海同胞の主義を實現することは理想として立派な

考へである。何等の拘束を用ひずして人道の理想が遺憾なく實現せ  
らるゝことは誠に望まじき事である。けれども此等は畢竟人間の高  
尚なる理想たるに止まつて實際には斯様な事實は出現して來ない。  
此希望は我人間界にては急に達することは出來ぬ。社會の人が皆正  
義人道を守つて法律を犯すものが一人もなければ法律を置く必要も  
なく裁判所も監獄も無用の長物となつて仕舞ふ。斯うなれば法律で  
束縛する必要も無いが、法律があつたからとて何等の束縛ともならぬ  
道理である。併し正義人道を守らぬ人が一人でもあつて勝手に法律  
に違反すればそれが直ちに法律に違反せぬ人の災となるのである。  
それで法律違反者がある限りは矢張り法律があつた方が人類の幸福  
と言はねばならぬ。法律が必要であれば政府も無くてはならぬので  
ある。人間が皆同一の能力で同一の分量の仕事をしたならば仕事に

對する報酬や名譽も全然平等であつて善からうと思ふけれども斯かる平等は實際に有り得ざる事である。無能者も有能者も勤勞者も怠惰者も絶對的平等の待遇では其實却つて不公平の感を強からしむるのみである。能力能率の自由競争は報酬又は所得の不平均を必然の結果として、私有財産は自然の産物と言はねばならぬ。財産又は報酬の絶對的平等は實際に實行することは不可能であり、若し強いて之を實行すれば却つて社會の退歩を來すと思ふ。

要するに絶對的自由平等の社會は我々の經驗の範圍では之を實現することは出来ぬ。我々が實際に經驗し得る實際の現代生活は民族の團結によれる國家生活である。人類が自然に作る共同生活は民族の團體であつて、此民族團體が獨立の生存を完うして行くには今日の人類生活の狀況では國家組織を有することが必要である。國家組織

を有たぬ民族は到底其生存の安全を期することは出来ぬ。よし國家組織はあつても其組織が不完全であれば矢張り民族の生存は安全で無い。今日の人類が作つて居る共同生活の組織では國家組織が最も完全なものであつて國家以外に一層よく生活を安定ならしめ人類の幸福を増進する途は無いのである。民族國家の境界を撤廢して自由平等の理想社會を作り出すことは今日では先づ不可能と言はねばならぬ。民族の特色と言ふものは其根柢が深く中々之を撲滅することは出来ぬ。國民性の自覺は祖先以來民族に代々の血管を流れて傳はつて來たもので民族の心から取り去るとは出来ぬ。民族的色彩は偶然に生じたものでも無ければ、已むを得ずして保存するものでも無くて、最も自然なる民族天賦の本質に基いたものである。極端な人道主義は實行し難き空想に過ぎぬ。現實の生命ある生活は民族本位の

國家生活である。歐洲大戰の目的がデモクラシーの主義を以て軍國主義を撲滅するにありと標榜せられ、四年餘の難戦苦闘の結果獨逸帝國が瓦壞した所から、國家主義が亡びて個人主義が之に代つて世界を支配する如く考ふるのは誤である。今日の社會に於て民族が生存を全うしようとするにも又何事かをしようとするにも國家の組織をなさずして爲し得ることは出来ぬのである。戦後は戦前に比して國家主義一層盛んになりつゝあると言つても宜しい。英米二國の如きは國民の結束は次第に鞏固となり國家の組織は益々整頓しつゝあるものである。唯戦前と異なる所は戦後の國家は軍閥や官僚を中心とせずして民族を本位とする事である。軍國主義を標榜せずして民衆主義を基礎とするのである。歐洲大戰が事實上國民の總動員によりて繼續され且成功したやうに平和の國民生活も國民全體の協力によらぬ

ばならぬとは極めて明瞭である。世界にデモクラシーの思想の普及した結果は民族を本位とした國家主義を盛ならしめたと言つて宜しい。然ら現代各國の實狀を観察して見れば一方には正義人道主義を標榜し又は平和主義を以て人類の理想として居るに拘らず實際各國の實行して居る所は民族中心の劇烈なる國際競争である。如何なる國も我國の獨立を確保し我國の文化を進め自國を最良の國とし我民族に最大の幸福を享有せしめんと努力して居る。現在が此通りである計りで無く將來とても人類の存在する限り國際競争が全然無くなつて仕舞ふ時期が來やうとは考へられぬのである。高遠の理想に走つて現實に遠かり空想の夢を貪つて居るのはとも角であるけれども、苟も我等が經驗して居る生きた現實の社會では國際競争即ち民族競争は到底脱却することが出来ぬ。自分の考ふる所で民族の競争は極

端に走り其度を失へば人類の慘害と不安とを來すことは今回の世界大戦が能く證明して居る所である。吾々人類は單に殺伐なる優勝劣敗の原理によれる生存競争の成行に任せて此悲酸なる結果を已むを得ぬ事として黙視し居るに忍びぬ。所謂人道主義が平和を唱へ戦争を非難するは此爲である。けれども其の反對に若し人類が全然無競争の状態になれば平和にはならうけれども奮勵努力の動機を失ひ生氣なく熱心なく火の消へたやうな沈滞の状態に陥つては進歩が俄かに止まつて仕舞ふのが自然の結果である。斯様に考ふれば民族の競争は人類の進歩即ち幸福の増進に必要な條件であると言はねばならぬ。民族無競争の状態は我々の理想では無いと思ふ。唯民族の競争が野獸的にならぬやうに人道を以て緩和すべきであつて、人道の爲に競争を撲滅してはならぬ。

千古未曾有の世界大戦は如何にして勃發したかと言ふ問題は歴史家外交政治家軍人等其立場の異なるに従つて解釋が必しも同じくあるまいと思ふ。併し自分の解釋では各民族の利害關係即ち國際競争が戦争を貫く所の骨子であつて、此點に就いては恐く異論を挿む餘地は無いと思ふ。次に此大戦亂の勃發の當時にはとても三箇月以上繼續は出來まいとか一ケ年以上は保つまいと言つて居つたに拘らず無慮四年有餘を支へ得たのは何の爲であるか。自分は此事實は開戦と同様國際競争が如何に劇烈であるかと言ふことを裏書する實例としたいのである。交戦國民が自己民族の利害を擲ち民族の利害も運命も意に介せぬやうになれば何時戦争を中止しても差支無い譯である。夫れに拘らずあらゆる艱難を忍び刻苦に耐へ國家の全力を盡し民族の運命を賭して絶えず真劍の態度で戦つたのはつまり民族的自覺に

基くもので國際競争の爲であると言はねばならぬ。又戦争の終結となつた平和條約に就いて詳細に考察しても同様の結論に到達すると思ふ。尤も平和の意義が示す如く平和條約は正義人道を標榜して居ることは勿論で米國大統領ウキルソンは此主義を提げて活動し殊に國際聯盟の成立に就いて非常なる努力をなした事は世界周知の事實である。けれども會議の要點は各國自己の國家の利害から出發して議論されたとは明瞭であつて、各國の使臣も自國の利權を得ることに最も力を用ひたのである。正義人道は争を決する標準であつて争を起す本では無い。國際の争は自國本位の立場から起る。正義人道は其争を最も公平に決せんとするのである。戦争がすんでも國際競争は止まぬ。大戰後の新時代は如何なる民族も安閑として平和の夢を貪る時期でない。

歐洲大戰の教訓に鑑みて見れば、今後戦時たると平時たるとを問はず、よく獨立生存を完うし得る民族は生存の實力を有する民族でなければならぬことが極めて明白となつた。民族生存の實力とは形式的に言へば生存に必要な體力知力情性意力である。實質的に言へば民族文化の進歩充實の程度である。さらば民族の體力知力情性意力は如何にして最も充實し、又民族の文化は如何にして最も進歩するかと言ふことを考へねばならぬ。此問題を解決するには今日まで實力ある民族は如何にして其實力を充實し來つたかと言ふ事實を調べるのが最も近道である。個人の體力乃至知力情性意力は一人一人としては如何に優良であつても結合統一せねば民族の生存を保證するに足らぬ。又民族の生存と言ふことを全く考へねば個人の心身を發達させようと言ふ動機が弱い。又民族の文化の進歩は民族の協力に待た

ねば到底不可能の事である。民族の實力即ち其體力知力情性意力の如何竝に民族の文化の充實程度の如何が眞に民族の生存を左右するものであると言ふことを自覺するものが眞に民族の體力知力情性意力の充實を圖り民族文化の進歩に努むるのである。約言すれば眞に民族の實力の養成を促す原動力は民族的自覺であると言はねばならぬ。現代の社會に於て眞に生存を完うし得る民族は其興亡盛衰は舉て民族自身の責任に歸することを覺悟して奮勵努力する民族である。即ち民族的自覺を有する民族である。生存の實力なき民族が生存を完うする能はざるとは生活の實力なき個人の生活が安定ならざると同一の理由である。又民族的自覺が民族の生存に缺く可らざるとは個人の生活に個人の自覺が重大なる意義を有するのと比較して考ふることが出来る。無自覺の個人は醉生夢死の間に一生を無意味に終り自覺

せる個人は自覺によりて其の人格を向上充實して其人生の意義と價値とを造り出す如く、民族も亦民族的自覺によりて始めて其の獨立生存を完うし其健全なる發達を遂げるものである。無自覺の個人が無意味に一生を送るのみならず動もすれば自己を辱しめ自己を欺く行為を敢てするが如く、無自覺の民族は自ら墮落衰亡の運命を招き世界の落伍者となる虞があるのである。民族の存亡は一に民族的自覺の如何によることは自分の深い確信である。民族的自覺は民族生活の原動力で其の盛衰興亡の根源である。民族的自覺は民族を結束し一致して其の獨立發展の爲に奮勵努力せしむるのである。一人の英雄又は少數の有力者が無自覺の衆愚を率ゐて民族の運命を決したのは最早古い過去の時代に屬して居る。今日の新時代にあつては民族の運命は民族自から之を決せねばならぬ。民族全體が強い自覺に基い

て其の獨立生存の基礎を固め最も堅實に發達進歩を圖るべきである。民族各自が民族生存の原理を徹底的に理會し熱烈に民族の發展を要求せねばならぬ。斯の如くなるには民族的自覺は決して外部から注入し又は押賣したものでは無効である。民族自身の内部の奥底から自然に湧き出て來たものでなくてはならぬ。民族擧つて内心から自覺して來なければ民族の生存は確實とは言はれぬ。傳統的の愛國心は動もすれば急劇に變化した時代思潮によつて懷疑的氣分を帯びんとして居る今日、自分は聊か民族的自覺の本質を究明して見度いと思ふ次第である。既に度々述べたる如く民族的自覺は民族生活の生命とも言ふべきものである。民族を統一結束する原動力である。民族を奮勵努力せしむる動機である。自分は今此民族的自覺を分解して次の六の要素を擧げて見度いと思ふ。

## 二 民族的自覺の要素

民族的自覺の要素として第一に擧げ度きものは同族意識である。即ち民族的自覺の同族に對する方面である。民族の各自が自己の血管中には同族の血液が祖先を貫通して流れて居ることを自覺するのである。此自覺は民族的自覺即ち普通愛國心と稱するもの、最も根本的のものであると思ふ。此自覺に本いて自己の利害と民族の利害とを同一視し一致團結して團體の爲に圖るやうになるのである。同族意識は民族的自覺即ち愛國心の本質の宿る所と言つて宜しい。さて此同族意識の根源は如何なる所にあるかと考へて見るに我々は勿論のこと之を家族生活に求めねばならぬ。家族は人類の作つた最初の血族團體であつて、民族と言ひ國家と言ふ如き共同生活團體の單位



と言ふべきものである。家族が同族意識を有することは言ふまでも無い。民族は嘗て家族の範圍を擴張したものに過ぎぬ。家族は利害を共にし苦樂を同うし結合統一して家族全體の獨立生存を圖り全體の發展幸福の爲め努力するのである。家族團體は民族團體と其の本質に於て異なる所が無いと言つて宜しい。

自分は茲に家族の同族意識は何故に利害共同の意識を生ずるかを考察して見度いと思ふ。自分は此意識の根源を親子關係殊に母子の關係に求め度いと思ふ。世間には往々極端なる利己主義を唱へ自己の利益にならぬ限りは他人の爲に何事をもなす必要もなく又其義務も責任も無いやうに考へて居る者があるやうである。人間が個人として他人の爲に自分の利益を割きて與へ又は自分の生命までも犠牲に供することがあるのは如何にも利己主義の立場からは有り得ぬ事

のやうである。けれども此事は如何なる野蠻の人類にも如何なる無學なる貧民にも母子の間に之を見ることが出来る。之は決して人が教へた結果では無い。人間の自然の性から出でたものである。利己主義の人は之を見て夫れは子供が生長してから老後の世話をさせようと言ふ利己心から起つたものであると異議を挿むかも知れぬ。けれども是は極めて淺薄な見方である。胎内の兒は生きて生れるか死んで生れるか分らぬ中から母親は胎兒の爲め幾多の犠牲を拂はなければならぬ。又生れ落ちてから世話をする母親が子を愛するのは決して打算的利己的では無い。母の愛は必ずしも人類のみに限らぬ。高等の動物に之を見ることが出来る。高等動物は老後決して其の子の世話にならぬけれども細かに行き届いた子供の世話の仕方はよく観察すればする程人を動かすに足る程である。つまり母親の愛は生

物天賦の本能に基くもので自然が人類の保存を完からしむる爲に行はしむるのである。本能であるから教を待たずして自然に働くのである。母親の愛は人類保存の本能の發現であるとするのが最も合理的の考へ方である。

母の愛があるから子供が安全に生長し人類が繁昌し行くことが出来るけれども、若し母に此利他的の本能が無くて誰も教へなければ母は十分に子供の世話をせぬと言ふやうに利己主義一方であつたならば、人類は果して存続を完うすることが出来るであらうか。人類が生存して行く爲めに決して個人個人の利己主義計りでは出来ぬ。其根本には先づ母が子の爲に犠牲を拂ふと言ふことがなければならぬ。即ち自他利害共通の意識がなければならぬ。人類が利己主義の境界を破り他人の利害に同情する事實は母の子に對するのが最根本的で

ある。利他的要素が道德に缺く可らざる要素であると考えれば人類道德の根源は家庭生活にあると言はねばならぬ。切言すれば母の子に對する愛に基くものである。愛は母子を結合するのみならず人類の道德を完成するに最も重要な要素である。

親子の關係に先ちて夫婦の關係がある。夫婦の關係は愛によつて結合された利害共同の關係である。愛は一方のみに限らず交互關係である。夫婦は相愛によつて成立すものである。相愛であるから夫は妻の爲に圖り妻は夫の爲に盡すのである。母子の關係に於ても同様で母が子を受するから子が母を慕ふのである。子が母を慕ふのは必しも報酬の考から出たものでは無い。其本質は子の母に對する自然の愛情に出たものである。自分は此が我邦の國民道德で大切なる孝の起源であると思ふ。家族の中では夫婦相愛し母子が相愛

するのみでは無い。父子も母子同様の愛情が人間の本能に基いて自然に存在して居る。同胞には同胞の愛情がある。總括すれば家族には家族相互の愛情があつて其間に多少の厚薄親疎の差はあるけれども此愛が家族を結合し利害苦樂を共にせんとするのである。此愛は家族の愛とも言ふべく別言すれば愛家心とも稱すべきである。愛家心は他の家族に對し自己の家族を一個の共同生活の血族團體と見るのである。即ち同族意識に伴つて愛家心が生ずるのである。愛と憎とは相表裏したものであるから一方に自己の家族を愛する情があれば、家族を愛し又は家族を利するものは他人でも之を喜び愛するけれども之に反して我家族を憎み又は之に害を加へんとするものがあれば之を敵として之を憎むのである。是が所謂敵愾心の起りである。社會の進歩により家族は次第に其範圍を擴張して氏族となり民族

となり遂に國家の組織を完成するに至るものである。親子夫婦同胞間の愛情が其範圍を擴張して家族相互の愛となり愛家心を作り出した如く愛家心は血族團體の發達に伴ひ遂に民族成員相互の愛となるのである。民族成員相互の愛は民族全體が利害苦樂を共にして生存を完うせんとするので民族心と言ふことが出来る。是が即ち普通所謂愛國心で吾人が茲に言ふ民族的自覺の第一の要素であるのである。斯の如く考ふれば民族の同族意識は家庭から起つて居ることは明瞭である。愛國心は愛家心を擴張したものである。愛家心は親子夫婦同胞の愛を擴張したものである。所謂愛國心は民族相互の親みから起つたもので國家に對する愛着心となり國家の結束を固うする能力となり其發展進歩を促す動力となるのである。斯の如く愛國心は家族を中心として次第に範圍を擴張したものであるけれども其本質

が同一のものであるから範圍の大なるものが必しも範圍の小なるものゝ愛を妨げぬのである。夫婦の愛は親子の愛を妨げず愛國心は愛家心を妨げぬのである。即ち愛國心強き人は同時に郷里を愛し家を愛し孝心深きことが出来るのである。

愛國心の本は愛家心であり、愛家心の本は家族相互の愛であり、家族相互の愛は結局夫婦親子の別を問はず人類保存の本能の發現である。とすれば愛國心も民族的自覺も畢竟民族保存の本能に基くことが分る。牝鹿が子を育つる時期に人が牝鹿に近くことは極めて危険であるから奈良公園では其時節になれば態々遊覽客に注意の立札をする程であるが、是は全く母親が死を以て子を保護する本能に出で、居る。動物の牝が其子の爲に敵を防ぎ人の母親が子の爲に盡し家族が相互に對して利害を共にし苦樂を同じくし家族に害を加ふるものを協力

して防ぐのも、民族が團結して敵を防ぐのも、其本質となるべきものは結局民族保存の本能に出でたものである。つまり民族が亡びて仕舞はぬやうに自然が賦與した能力の然らしむる所である。家族の同族意識も民族の同族意識も共に團結の力となるのは即ち民族保存の本能の然らしむる所である。即ち人爲の力でなく自然の力である。教へてから生じたものでなく人類に固有な本能に本づくものである。

民族の同族意識には當然民族保存の本能を包含して居る。考へ方によつては民族保存の本能が同族意識として發現して民族を結合し其生存を確保して居るとも考ふることが出来る。此二つは二つの別のものとしても考ふることが出来るけれども同族意識は只同族である意識するに止まらず同族は利害を共し苦樂を同じうするものであると自覺して益結束を固くし共同の努力をなすことを包含するも

のであるから自分は別に箇條を改めず同一の意識として論じて置くのである。

つまり同族意識は民族保存の本能の發現である。民族に民族保存の本能が必要であることは個人に自己保存の本能が缺くべからざることと同一の天理である。人が飢えたる時に食を求め害を加ふものを防ぐのも民族が祖國を危うくし團體の生存を害する外敵を憎み對敵行動を取るのも同一の必要から生じたもので同一の意味を有すの本能から出でたものである。個人に自己保存の本能がなければ其の生存を完うすることが出来ぬと同様に民族保存の本能がなければ其の生存は決して安定でない。

同族意識又は民族保存の本能より出でた愛國心は同族自然の愛情に基いたもので同族を結束し外敵に對して其生存を安全にせんこと

を努むるものである。詩經の小雅に「兄弟牆に鬪ぐとも外其の侮を禦ぐ」と言つてあるのは同胞の對外結束は骨肉の自然の情に基くものなることを道破したものである。外敵の襲來に對する民族の結束も其本質に於て何等異なる所は無いと思ふ。同族意識に本づく愛國心は民族の危急存亡の秋に於て最も強烈に興奮し所謂民族的自覺を民族全體に喚起するものである。平時にはあるか無いか氣がつかぬ程に潛んで居た意識が俄に眠から目が醒めたやうに明瞭になるのである。我等日本人は日清日露の兩戦役に於て最も切實に此民族的自覺の覺醒を経験した。今次歐洲大戰に於て交戦國は孰れも熱烈なる愛國心に鼓舞せられ舉國一致眞劍の態度を以て勇往邁進したのである。今回の大戰程民族の一致團結を要求したものは無く又各民族が今回程全力を盡して戦つた事は無いと思ふ。愛國心強烈なれば民族の元氣

旺盛にして雄心勃勃々必勝を期して努力するのであるけれども、民族の愛國心乏しく同族意識が少ければ民族の勇氣も乏しく必勝の目算も立たず、意氣銷沈躊躇逡巡首鼠兩端の醜態を演ずるか、甚しければ強敵の威嚇に驚愕狼狽し戦々兢兢々又は失望落膽するより外は無いのである。更に甚しくなれば賣國奴を生じ軍隊に逃亡者を出すのである。

平時に愛國心が乏しく見えて居つた民族が民族の運命を左右すべき大戦争に出會つて目が醒めた様に民族的自覺を喚起するものもある。今次の大戦に於ける佛國の如きは其適例であると思ふ。舟に弱い人は少々の暴風に遇へば忽に弱りはて、他人には見られぬ程の容態となる事が少く無いが、さて暴風が愈烈しくなり最早舟が沈没しさうになつて來れば、如何に舟に弱い人も俄に正氣に立ち歸り枕について横臥して居る者も起き上つて少しなりとも手助けをし、水が入つて來れ

ば少しでもかひ出して、舟の沈まぬ工夫をするのである。人は氣分が悪いか胸が悪いか言つて臥て居られる間は如何なる贅澤も言ふけれどもいざ自分の命が危いとなればソナ贅澤は皆打捨て、人間自然の自己保存の本能に立歸り、全力を盡し真劍の態度で生存を完うせんと努むるのである。難船の時は一人の乗客がさう思ふ計りで無く同舟の人は皆運命を共にするのであるから結束し共同して舟を沈没させぬ様にするのである。太平無事の時に愛國心を疑はれた佛國人が今次の大戦に熱烈な愛國心を表はしたのは民族保存の本能が大戦によつて赤裸々に眞面目を呈して來たものと見て差支なからうと思ふ。即ち同族意識が枯草に火をつけた様に喚び起されたのである。同族意識即ち愛國心の喚起は決して戦時に限つたものでは無い。平時に於ても國運發展の勢隆々たる民族にあつては愛國心は極めて

旺盛なものである。切言すれば國運の發展は愛國心を原動力とするのである。愛國心が民族全體に弱くなれば國力が衰運に向ひ衰運に向つて居る民族は屹度愛國心が弱くなつて居ると言つて差支無いのである。

個人の自己保存の本能の根強いことは前に擧げた難船の例で自ら明瞭である。人は危険に臨んでも、飢餓に瀕しても、如何なる苦痛を忍んでも何とかして生き延びて行かうとするのが人性の自然である。併し往々にして自己保存の目的に反する行動をすること無きにしもあらずである。必要な飲食が出来なくなつたり、自から好んで不攝生をしたり、自分の身體を傷けたり甚しきは無意味に自殺をしたりする類である。是等は普通の健康體では容易に無い所で多く身體上又は精神上の病的状態に基いて居るものである。之と同じく民族が全

く愛國心を失ひ同族意識を失ひ結束の力なく一致共同の精神が無くなり民族の生存に反するやうな行爲を見るやうになれば民族は最早病的状態に陥つて居るものであつて民族は自から衰亡に近づきつゝある時である。是は人間に缺く可らざる食欲が無くなつて仕舞へば死期を待たねばならぬのと全く同一の意味合のものである。

民族保存の本能の發現としての同族意識は戰時又は對外關係に於て最も著しく興奮するのみならず、平時外國に出でて他の民族の間に交はつて生活するときにも同様に著しい。若し同族の人が若干數あれば如何なる形に於てか結合團結する。是は必ずしも自衛の目的を自覺して必要に迫られて行ふものとは限らぬ。同族の人が所謂「類を以て集まる」のが人情の自然である。單獨に外國を旅行して久し振りにて同族の人に會すれば何とも言はれぬ親しみと愉快とを感ずる。

此親しみと愉快とは祖國に於て同族を結合して居る力であつて、異境にあつて久しく此感情が潜在して居つたのが同族によつて喚び起されて深刻なる印象を與ふるものである。此同族に對する感情を潜在せしめて自在に之を發露する機會に接せぬか又は必要に迫られて久しく之を抑へねばならぬと言ふ境遇に居れば人は言はれぬ苦痛を感じるものである。遠く祖國を離れ家族知人に遠かつて居れば祖國を慕ひ早く祖國に歸り度いと感ずる。是は同族意識より出でた愛國心の然らしむる所である。

同族意識は民族保存の本能の發現によつて自然に民族を結合して其生存を完うする力であることは以上述べた所で極めて明瞭であらうと思ふ。民族は此力を原動力として盛衰興亡の運命を共にするのである。斯の如く民族共通の運命は代々連続して民族生活の歴史を作るのである。民族生活の歴史は民族共通の運命の歴史であるから國史を回顧することは同族意識を喚起する所以である。

民族的自覺の第二の要素として擧げ度いのは民族の同國意識である。即ち同族が同一國土に住むと言ふ意識である。即ち民族的自覺の國土に對する方面である。同族意識に本づいた愛國心は血族團體が住所が固定して同一の場所に共同生活を行ふ所から發達したものである。而も其本質は前にも屢々述べた如く民族保存本能であつて血族關係が結合の骨子をなして居るものである。併しながら同族を愛する心はやがて同族が生活を共にする土地即ち國土に對する愛着心を生ずるのである。我が國土は自己が今同族と共同生活を營む土地なるのみならず、自己の祖先が生息し愛着した土地である所から國土を愛するの情が二重に深くなる。是が所謂祖國の愛である。



共同生活の單位は家族であるから家族に對する愛はやがて家族と生活を共にする住家を受するやうになる。住み馴れし我が家我が宿は我々に無限の愛着心を感じしむる。家の中の一事一物は勿論四季の草木孰れも他日思ひ出の種とならぬものは無い。父母の家庭を中心として親族あり隣人あり郷人あり少し廣い意味に於て日常同郷の生活を共にするのである。郷土生活は同郷人と親しむのみならず郷土其物との親しみを生ずるものである。殊に郷土の山水風物に就いては深い愛着心を生ずる。郷土は個人が日々接觸する生活の範圍で郷人に共通なる直觀の範圍となり、共通に思想感情を支配する限界を作るものである。山國に生れたる人は山嶽を愛し、久しく山嶽を見ざれば胸に一種の缺乏と苦痛とを感ずるのである。海岸に生れたる人が海を愛し、島を愛し、海岸の風光を愛するのと同様である。要するに

郷土生活に於ける自然界の深刻なる印象は忘れ難く抑へ難い愛郷心を作るのである。愛郷心は風土異なる土地に行けば強烈に喚起され所謂思郷病を生ずるのである。久しく旅行して住み馴れし郷里に近けば遠方から見ゆる山川草木が無限の親みを感じしむるのは愛郷心の發露である。久しく海外に遊んで歸途海上遙かに富士の秀峯を見つけて氣も魂も飛び去るが如き心地するのは言ふまでも無く愛國心の發露である。此の愛國心即ち同國の意識は愛家心乃至愛郷心を擴張したものに外ならぬ。廣く自國に親しめば親しむ程自國に對する愛着心を増す譯である。父母が故郷を離れ諸方に轉職して廻る家庭の子供に郷土を愛する心が乏しいのは事實である。之は久しく同じ土地に親しみ馴るゝ餘裕が無い爲である。斯かる子供は決して一定の故郷に成人した父母と同一な愛郷心を持たぬのである。之を押し

て行けば父母が外國に行つて子を生み之を養育すれば子供に同族意識はあるとしても祖國に於いて生長したものと同一な同國意識即ち國土に對する愛着心を作ることは困難であると思ふ。

要するに自國に親しむと言ふことは祖國を愛するの念を生じ民族生存の必要條件たる國土を護る心を促すのである。國土を護る心は結局民族の生存を確保するものであるから同族意識を助けて民族を結合し民族の生存を安全ならしむる原動力であると言はねばならぬ。民族の生活と國土とは離す可からざるものであるから同族意識が主要の要素となつて居る民族精神を昔から愛國心と名けた次第であると思ふ。前にも一言した如く吾人同族が今日共同生息する國土は同族の祖先が共同生活を營み運命を共にして愛護したる土地である。我々は此土地を愛護して同族の生存を祖先と同様に安定にせんとす

るのである。今若し假りに愛國心から同族意識を除き去れば同國意識は民族結合の力としては極めて薄弱なものとなり了るに相違ないけれども我々が愛國心と言ふときには決して國土計りを愛する意味では無い。寧ろ國土を共有する同族を愛するの意味が主要の部分であると言はねばならぬ。換言すれば我等同族の祖先が同じ土地に住し同じ土地に樂み又此土地を外敵に奪れない爲に種々の努力をなしたと言ふことが祖國と言ふ觀念の中に包含されて居る。それであるから民族的自覺の要素として考ふれば同國意識は時として同族意識と同様に取扱はるゝことを認めねばならぬと思ふ。祖國を愛すると言ふときに土地其物に對する愛着心が強いのは祖先の住んだ土地と言ふ自覺があるからである。即ち同族の生活の歴史が土地にからまりつくからである。同國意識は同族意識に伴ふて民族を結合統一して

國民的自覺を強くするのである。

民族的自覺の第三の要素として挙げ度いのは同語意識である。即ち同一國語の意識である。同族が祖先以來同一の國語を共用して居ると言ふ意識は同國意識の如く民族を結合統一する一大勢力となるのである。同族は普通同一の國土に住居して同一の國語を用ひて居るものであるから同語意識と同族意識とは極めて密接の關係を有するものである。切言すれば同族意識中には當然其要素として同語意識を包含して居るものと見ても差支無いのである。言語は人類相互の思想感情を交通する最も大切な機關であるから、國語が同一であれば思想感情の交通が自由自在に行はれるから思想上の誤解や感情上の衝突が少く同族の意識を明瞭にし其結合を一層親密ならしむる助となるのである。假令同族であつても特殊の事情で國語が異なれば

何となく意思感情の疏通が圓滿を缺いて結合統一の困難を來すことは其例に乏しくない。國語が同一なることは同族の意思感情を疏通するのみならず先祖代々同一の國語を用ひたるが如く民族生活の長き歴史に於て喜憂を分ち苦樂を共にしたることを思はしめ民族の結合統一上偉大の力となるものである。言語が自由に通すれば假令異民族であつても近づき易く親しみ易きものである。まして同語意識に同族意識と言ふ背景が伴つて居れば民族の結合を親密ならしむるのは當然である。國語は決して一朝一夕に出來たものでなく長い長い歴史を経て民族と共に發達生長したものであるから國語の沿革はやがて民族の歴史を語るものであつて國語に親めば親しむ程同族の意識を促し同族の結合を強からしむるものである。

同一國語の意識が民族の結合統一を強むる作用は之を二重に考ふ

ることが出来る。第一には國語が同一であると言ふ事其自身が直接に同族意識を促して民族の結合統一を強からしむる事である。前にも述べたるが如く同一國語は民族相互の意思を疏通し感情を融和して自ら親密ならしむのみならず其住居する國土の同一なることに民族が祖先を同じうし民族生活の歴史を同じうし父祖代々運命を共にしたることを自覺しめ將來も利害を同じうし進退を一にせんことを覺悟せしむるのである。第二には國語にて言ひ表はされ又は書き表はされたる思想感情の内容が間接に民族結合の力となるのである。國語の言ひ表はし又は書き表はして居る思想感情の内容は過去現在を通じ民族を支配し民族に共通な思想界感情界を代表するものであつて代々の國文學は民族の精神生活の全部を代表して居るものと言つて差支無い。民族が思ふた事感じた事は其の民族の特色を併

せて國語によつて言ひ表はされ書き表はされて現在には生きた國語として用ひられ又文學となつて永遠に保存されて行くのである。民族の性格は其精神生活の上に表はるゝ通りに國語が偽らざる眞面目を傳へて行くのである。斯様に考ふれば斯かる内容を有する國語を用ふる同族は自然に其の内容に同化されて行くのである。即ち國語は民族成員の思想感情を民族化して行く作用を持つて居るのである。つまり平素同一國語を用ひ同一の國語を以て書き表はした文學に親しむ同族は祖先以來民族を支配し民族を結合し來したる思想感情に自然に感化せられて行くのである。國語の民族に及ぼす感化の力は實に偉大なるものである。各國の國民教育に於て國語の統一を圖り且つ國語教授を大切にするのは之が爲である。

國語が民族の思想感情上より同族意識を促し其結合を助くる力と

なる事は遠く外國に遊んで居るものが思ひ掛なく同國人に出遇ひ生れてから使ひ馴れたなつかしい國語で思ふまゝに話が出来るときに最も痛切に感ずることが出来るのである。殊に外國語に不得手の爲に思想感情の交通に不便を感じ旅情寂寞を感ずる人々は此感が一段と深いものである。異郷に於ける國語の音響は胸の奥底の心琴に觸れて此上も無い親しみと喜びの共鳴を興ふるものである。自國では此共鳴が外國ほどに明瞭で無いけれども民族意識中に潜在して居るとは疑ふことは出来ぬ。自國內に居つても他所に居つて久しぶりに故郷の方言を聞いた時には矢張何とも言へぬ共鳴を感ずるのである。身體健康の人は必ずしも健康なることを自覺せずとも健康の事實が存在する如く同一國語を用ふるものは必ず國語の親和結合の力を自覺せずとも事實上此方に支配されて居ることは大なるものである。

民族的自覺の第四の要素として挙げ度いのは同一文化の意識である。民族の文化が同一であると言ふことは其裏面に同族、同國、同語の意識を伴ふもので此等の意識と同様に民族結合の力となり愛着の情を生ずるのである。民族の文化は經濟政治道德宗教言語風俗學術技術藝術文學等其如何なる方面たるかを問はず民族生活の形式と見れば同族は同一の生活状態を有するのが自然の勢である。民族文化の由來一朝一夕のものでなく國語の發達と等しく悠久なる民族生活の歴史と其生命を同じうするものである。切言すれば國語は結局文化の一方面であるから同一國語の意識に就いて前に述べた事は其儘移して之を同一文化の意識に適用することが出来る。文化は本來民族共同生活の産物であるから同一文化の自覺は文化其自身が民族を結合するのみならず其由來は一層同族の意識を強からしむるのである。

風俗習慣や宗教道徳の同じこと同一の法律や同一の政府を有つて居ること等は孰れも文化が同一であると言ふ意識を生ぜしむるものでやがて文化の他の方面たる學術技藝美術文學の上にも民族共通の點があることを思はしめるのである。此等を綜合して考ふれば國民共同の理想も其民族の文化の如何によつて定まつて來るものと見ねばならぬ。國民共同の理想が民族の文化如何によつて定まつて來るものと考ふれば同一文化の意識は同族意識を促して民族を結合統一するのみならず國民の理想を統一し民族共同の目的に向つて民族を努力奮進せしむるのである。

民族的自覺の第五の要素として次に自分は民族自己價値の意識を擧げ度いと思ふ。民族自己價値の意識は之を民族特色の自覺とも名くることが出来る。此意識は以上數へ擧げた同族同國同語同一文化の

諸意識の如く民族の發達進歩の動機となるのである。民族は自然に自己の民族の性格即ち民族性又は國民性に特色あることを自覺し此特色には他の民族の及ぶ可らざる價値あるを本能的に自覺するのである。民族的自覺の一要素として考ふれば民族自己價値の意識即ち民族特色の自覺は極めて重要な要素と言はねばならぬ。民族に民族性あり國民に國民性あることはす度個人に個性あると同じ道理である。個人の一生の事業が個性の色彩を有するが如く民族文化の特色は民族性の相違に基くこと多きことは極めて明白なる道理である。民族の長處は人類發達の上から見れば文化進歩の上に於て他の民族を以て代ふ可らざる貢獻をなすものである。是が民族性の價値と言はねばならぬ。

各民族は自己の民族が優秀なる民族であると自信すると同時に自

己に屬することは何事にも價值ありと思ふのが自然の傾向である。所謂お國自慢なるものは即ち民族自己價値の意識で同族に愛着する愛國心の表現と見做すことが出来る。我住む國土をよいと思ひ我話す國語をよいと思ひ我文化をよいと思ふのは民族が本能的に自覺する所である。

けれども民族の特色は如何なるものであつても凡て價值ありと考ふるのは無理である。自國のものであるが故に凡て價值ありと言ふのは論理が正しく無い。民族の特色にも往々短處があり弱點があることは何人も認めねばならぬ。斯く言へば民族自己價値の意識は如何なる程度まで正當のものであるか即ち價値評定の標準は那邊にありやと言ふ問題を提出せねばならぬ。

此問題は各民族が自己に都合よき様に勝手に解決するのは公平で

ない。若し自分勝手に評價すれば結局自畫自讃に陥つて仕舞ふのである。今日の時勢では世界中の如何なる民族の前に出しても正當と認めらるゝやうにせねばならぬ。さうしやうとすれば正々堂々人類共通の正義人道の主義によるより外に仕方はないのである。此正義人道の主義によつて民族特色の價値標準を定めようとするれば自分は先づ第一の標準としては其民族の發達進歩を促すやうな特性を擧げ度い。其民族全體の發達進歩を促し其の幸福を増進する特色は其民族に取りて價值あるものと見ねばならぬ。之に反し民族の生活に無關係又は有害なるやうな特性は決して如何なる價値をも認めることは出来ぬ。第二の標準としては廣く人類全體の進歩に貢獻し人類全體の幸福の増進に資するものである。同族の進歩に貢獻せずして人類全體の進歩に貢獻すると言ふことは事實出来ない事であり、又人類

全體に對する貢獻は民族生活を營みつゝやるのであるから、此二つの標準は決して相互に矛盾するものではない。唯本末の關係から右の如く第一第二の順序をつけたのである。民族の特色の價値は民族性に就いて言ふことも出来、文化の上に就いて言ふことが出来るのである。つまり民族の能力の價値に外ならぬのである。民族自己價値の標準を斯の如く考へて見れば、民族自己價値の自覺はやがて民族の進歩發展延いては人類全體の進歩發展を意味することに歸着する。而して此關係は民族生活上吾人が實際に遭遇する事實である。

個人が自己の長處又は價値を自覺すれば自重自信自尊の心を生じ自から抱負を高くし益々自己の人格を向上發展せしめんと努むるものである。此意義に於て自負心自尊心又は名譽の情操は個人の發達の上に極めて貴重なるものである。民族自己價値の意識より生ずる

民族の自尊心も全く同様に民族の精神的道德的向上を促すものである。昔し我國の士族は平民に對して隨分威張り散らしたもので今日の正義人道又は公正の主義から言へば餘程の無理を通した事も少く無いが武士の自尊心が武士の精神的向上を促し武士道を維持するに偉大なる力であつた事は争はれぬ。武士は名を惜しみ面目を重んじたから耻を知り武士道を立てたのである。武士が耻を知らず自から輕んじ自から卑しめたならば武士道は忽ちに地に墮ちて仕舞つたに相違ない。武士のみならず今日の日本人は皆武士道の間接的精神と同じく外人に對しては甚しく自重心を持つて居る。是れは外國人の特に注意して居る所である。日本人は外國人に對して日本人の耻になるやうな事をしてならぬと言ふ考は日本人の間に餘程廣く普及して居ると思ふ。此の考へさへあれば民族は自重自敬して民族の向上を圖る



途に出づる外に仕方は無いのである。明治初年の海外留學生が日本を出發する前に天地神明にかけて皇國の爲を圖り日本人の耻にならぬやうにすることを誓つたと言ふのも、民族の自尊心から出で、居ると思ふ。民族の自尊心は他の國民の侮辱を防ぐと言ふ動機から自己の向上發展に偉大なる功を奏するのである。斯の如く考ふれば民族の自己價値の自覺は民族の進歩上是非なくてはならぬものである。即ち民族の義務と言つても宜しいのである。民族自己價値の自覺は一面に於て民族實力の自覺である。實力の自覺は自重自信を生じ民族の元氣を鼓舞し其向上發展に取りて偉大なる原動力となるものである。

民族自己價値の意識は盲目的感情的であつてはならぬ。よく其價値の標準を明にして民族の長處を自覺せねばならぬ。國民性の長處

と民族文化の長處につきて明確なる自覺を持たねばならぬ。斯くすれば民族が結束統一して共同の目的を達し共同の使命を實現することが出来るのである。斯の如く國民性の自覺と民族文化の長處の自覺とは民族的自覺の重要な要素と言はねならぬ。

民族的自覺の第六の要素として最後に述べべきは民族連帶責任の自覺である。是は最も進歩し最も徹底した民族的自覺を喚起するに缺く可らざる者で民族の理智が進んでから始めて明確になつて來るものである。連帶責任とは民族の盛衰興亡の責任は民族全體で共同連帶に引受ると言ふことを民族團體の各員が徹底的に自覺することである。此自覺は民族の理智が進んで來て民族共同生活の組織と原理とを理會し個人と民族全體との交互關係を自認するより生ずるのである。即ち個人は民族全體と、民族全體は個人と相互に密接なる關係を以て

共同共存をなす者なることを自覚するのである。簡短に言へば個人と民族との有機的關係につき徹底したる理會に基く自覚である。即ち民族全體の共同運命は個人の努力により、又個人の運命は民族の運命によりて支配せられ、孰れも共同の歸着點を有する者であるから此道理に就いて徹底したる理解を得れば民族團體の各員は民族の存亡に關して連帶責任の自覺に到達せねばならぬのである。民族的自覺は前に擧げた五つの要素の孰れによつても喚起せられるのであるが、必ずしも明確な連帶責任の自覺がなくとも民族の結束は中々鞏固なることが少く無い。けれども此第六の要素を缺いたものは決して満足とは言はれぬ。民族の連帶責任に受動能動の二方面を分つて考ふる事が出来る。受動的の方面は民族全體が其成員たる個人に對して責任を有する方面である。個人の運命は民族全體の興廢によりて定

まるものであるから、個人より言へば個人は民族全體に從屬する責任を有するのである。又民族全體より言へば民族全體の獨立を完うし其安寧幸福を圖ると共に其成員たる各個人の生活を安定にし其幸福を圖る責任を有するのである。即ち此方面に於ては個人は、受身の地位に立つのである。能動的の方面は民族の成員たる個人が民族全體に對するときに民族全體の運命が其成員たる個人の努力如何による所から、個人は民族全體の獨立生存は勿論其の安寧幸福の爲めに犠牲を供する責任を有するのである。此方面に於ては個人は能動の地位に立つのである。此兩方面の理解が徹底して民族の連帶責任の自覺が明瞭となつて民族が始めて道德的の共同生活團體となるので、民族が道德的の共同生活團體たるの本能を發揮して國步艱難の秋に際して如何なる困苦に遭ひても最後まで結束統一して運命を共にすることを得

るには此連帯責任の自覺が明瞭でなければならぬ。

民族の連帯責任の自覺は一國の危急存亡の秋に於て最も明瞭に且つ最も深刻に喚起せらるゝのである。今回の歐洲大戰は此點に就きて我々に一大教訓を與へたと言はねばならぬ。殊に交戦國は五年間に互れる戦闘状態で國民は擧つて知らず識らずの間に連帯責任に就きて最も深刻にして且有力なる訓練を受けた次第である。戦時の教訓は人心が一般に興奮して居る上に民族の運命と言ふ大問題が背景となつて居るから印象が徹底して居る。戦前に連帯責任の自覺の有無が疑はれて居つたものも民族の生存には連帯責任の自覺なかる可らずと言ふ事が深く深く心に印象された。交戦國民は孰れも戦後は戦前より遙かに自覺した民族となつたのである。我大和民族は日清日露兩戦役の際に此訓練を受けたのであるが此回の大戰の教訓は間

接であるから何となく國民の共鳴が薄いやうな心地がする。將來我民族が世界の競争場裏に立つ際には深く此點に注意せねばならぬ。民族の連帯責任の自覺は決して戦時に限つてのみ必要のものでは無い。平時に於て戦時の如く明瞭に此自覺が民族全體に普及して居つたならば民族の獨立生存は是より安定なること無く其幸福の増進期して待つべきである。自覺は凡て自己の力によりて自發的に自證自認した結果でなければならぬ。民族連帯責任の自覺も民族生活に關する徹底的考察の結果自認したものでなければならぬ。若し外部より強いられて已を得ず重荷の如く思ふ責任の自覺は何等の價値が無い。

以上民族的自覺の要素として(一)同族意識(二)同國意識(三)同語意識(四)同一文化の意識(五)民族自己價値の意識(六)民族連帯責任の自覺を擧げ

たのである。此等は一個の統一したる民族的自覺を假りに其の要素に分解して見たので其中の一つ丈けでも民族的自覺を促すのであるが此六方面が最も完全に具はつて居る民族的自覺は最もよく發達したるものと見るべきものである。民族的自覺の本質は人類天賦の民族保存の本能であつて、要するに以上の各方面は此根本的衝動的盲目的の本能が理性の覺醒と共に漸次に發達して内容が明瞭となつて益民族を結合統一し之を奮勵努力せしめて本來の民族保存の目的を確實に達成するに至るものと考ふことが出来る。同族意識は本能的に民族を結合し同族一致して運命を共にせんことを促すものであるが同國意識同語意識同一文化の意識は相待ちて同族意識を強からしめ愛國心を旺かんならしむるものである。民族自己價値の意識は民族の發達に伴つて次第に明白となり優等民族の自覺を得るに及んで

益奮勵努力して民族の發展を促進するものである。最終に民族連帯責任の自覺に到達して愛國心の道德的基礎が確立したものと云ふべきものである。此等の六方面は孰れも民族の結束を堅くし共同の努力を促し民族全體の獨立發展を圖る原動力となり總合して一の生命ある民族的自覺となるのである。故に民族的自覺は民族統一の自覺と名づけてもよいのである。

今日の國家は必ずしも以上の六要素を具へた自覺を有する民族團體では無い。先づ同族の血族團體で無いものがあるのみならず幾多の異民族が集まつて一國家を作つて居ることが少く無い。米國が幾多の異民族から成つて居るに拘らず世界の強國であり民族的自覺の旺んなことは特に吾人の注意を値するのである。希臘も多數の民族の混淆である。加之一國內に二三の異なつた國語が行はれて居つて

然も愛國心の強烈なる國民も現存して居る。白耳義は佛蘭西語を第一國語として居るけれども地方によりてフラマン語とワロン語が行はれて居る。瑞西にも獨逸語佛蘭西語伊太利語とが地方によりて行はれて居る。此外尙少數の住民はロマンチ語を用ひて居る。國家の組織を持たず一定の國土を持たず又固有の國語を持たず各國に散在寄寓し宗教と若干の風俗とを持つて居る猶太民族の如き者もある。猶太民族は國土を失ひ國家組織を持つて居ないけれども民族としては未だ全く亡びて居るとは言はれない。けれども他の民族と對立して行く程に結合して居るとも言はれない。國家組織を有する國民は全然同族の血族團體で無くとも通例何か一の大なる同族團體が中心となつて他の異民族を同化して殆んど初より同族なるが如き感情を抱かしむるに至つて居るのである。民族的自覺即ち愛國心が民族保

存の本能から出で同族意識を其骨子とする以上は血族團體より成る國家が最も自然なもので且つ其結束が最も鞏固なものであると言はねばならぬ。此意味に於て我日本國民は極めて幸福であると思ふ。我大和民族ほど同族意識の明瞭な血族團體は世界に類似が少いと思ふ。一國內に同族意識を缺いたものがあり、異國語を用ふるものがあり、風俗習慣が違ふものがあつたとしても文化が大體に於て統一し國民の自重奮勵の念強く連帶責任の自覺が確實であれば強い國家たることを妨げぬのである。けれども上述の六要素を完全に具へた民族的自覺を有する國民が最も鞏固なる國家を作り出し國家及其成員の生存を安全にし最も確實に其幸福を増進するのである。我大和民族の國家は最も之に近い國家であると思ふ。

## 三 民族的自覺と人道

民族的自覺は民族本位の自覺で自己の民族の獨立生存及發達進歩を目的とし理想として居るから一段廣い範圍から之を考察する必要がある。即ち民族的自覺即ち愛國心を人道の立場から觀察することである。是は正義人道の理想が世界の氣勢を支配しつゝある今日であるから特に之を攻究して置く必要があると思ふ。

人道主義と民族主義との關係に就いては前にも大體を述べた通りである。極端なる人道主義は愛國心を偏狭なりとし、甚しきは愛國心は不必要のものであると考へ、之に反して熱狂的な愛國者は人道主義は無意義の空想に外ならぬと痛論する。自分は斯の如き極端なる立場は孰れも謬見であると考へる。人道を過重すれば愛國心は危くな

る。けれども全然人道を無視することも出来ねば又愛國心を捨つることも出来ぬ。自分の考では人類の生存は民族の生存を基礎とせねばならぬ。此民族生活を基礎として人道の理想を出来る限り實現することが人間の實行し得る最も合理的で且つ最も確實なる方法であると思ふ。民族的自覺を無視し民族の結合統一を離れて漠然として人道を説き人類の幸福を求むるのは畢竟事實に基礎を持たぬ空想で地上に於て實行の出来ぬ事である。此立場からして民族の獨立生存を完うし其結束を堅くし其進歩を鼓舞する原動力として以上民族的自覺の内容を説明した次第である。自分の考へでは人道と愛國とは必ずしも相反し相矛盾するものではない。之を反對せしめ且矛盾せしむるものは偏狭なる愛國心で却つて愛國の目的に反するやうになるのである。眞に愛國の目的を達するには是非とも人道と調和し

て行かねばならぬ。人道と愛國とを矛盾せしむるのは必ずしも偏狹なる愛國心計りでは無い。極端なる人道主義も同様である。人類の共同生活に於て血族關係を無視し随つて民族の血族的團體を無視して直ちに人類全體の幸福を圖らんとしても事實上實現が出来ぬ。極端な人道主義は却つて人道の目的を達することが出来ぬ。眞に人道の目的を達するには先づ民族の生存を基礎として其安寧幸福から出發せねばならぬ、人類全體の社會は之を構成する各民族が圓滿の發達を遂げ安寧幸福を享くるにあらざれば決して人道の理想を實現することは出来ぬ。人道主義は愛國心と相補ひ相調和して初めて其目的を達し得るものである。人道主義と愛國主義即ち民族本位主義とは孰れの方面から出發して考察しても結局兩者の調和に歸着せねばならぬと言ふ結論に到達するものである。

自分は民族的自覺の要素を述ぶるときに主として民族を本位として考察したけれども、如何なる民族も一民族丈け全然他の民衆と無關係に獨立し孤立して生存し得るものでは無くて、民族よりは一層範圍の廣い人類全體の共同生活の一員を構成して居るのである。自己の民族の狹隘な境界から脱出して一段高い標準から考ふれば人類全體の幸福は諸民族の結合協同を必要とするのである。是は家庭の幸福が家族の結合協同により民族の幸福が其成員の結合協同に待つのと全然同一なる理由によるのである。民族全體の幸福が其の成員の連帶責任の自覺を要するものとすれば人類全體の幸福は之を構成する諸民族の連帶責任の自覺を必要とするのである。斯の如く考察すれば各民族は同族の意識を有すると同時に一面に於て人類同胞の意識を持たねばならぬ。人類同胞の意識は正義人道の觀念の因つて起り

來る源泉であり人が人類全體の幸福を圖る爲めに努力する根柢となるものである。一民族が假りに全然他の民族から孤立隔絶して人類全體の幸福を圖ることを拒絶したものとすれば其民族は世界の諸民族の間に立ちて其生存を定定ならしむることも出來ず、まして其の幸福の圓滿を期することも出來ぬ。民族的自覺は一面に於て人類同胞の自覺を伴ひ人道の理想と調和して行くことが必要である。正義人道の叫びの喧しい今日の時勢に於ては特に此事が大切であると思ふ。民族保存の本能は當然自己民族の獨立生存を主張するけれども今日の時勢では他の民族を敵視し其の撲滅を要求してはならぬ。我が民族の獨立生存を主張するやうに他の民族も同様に自然に其獨立生存を主張するからである。自から獨立生存を主張するならば他の獨立生存も認めてやらねばならぬ。之を顧みずして他民族の撲滅を要

求するのは暴虐である。不公平である。正義人道に適はぬのである。是は一個人が生存する爲に他の個人を撲滅すべからず又之を撲滅する必要が無いのと同じ理由である。民族は自己の獨立生存の爲に他の民族の進歩幸福を妨害してはならぬ。常に妨害せぬのみならず之を助けてやらねばならぬ。是が正義人道即ち人道の理想の要求である。各民族は自國を愛すると同時に他國を尊重せねばならぬ。自國の利害の爲に忠誠を盡すと共に他國の利害に對して正義を守らねばならぬ。然るに自國の利害のみを以て最高標準とし正義人道を其犠牲に供し如何なる非道横暴を行ふて顧みることなきは偏狹なる愛國心である。斯かる愛國心には愛國心の美名を與ふ可らざるものである。斯の如き極端なる利己的國家主義は侵略的排外的となり傍



若無人の態度を以て暴力に訴へて自國の利益の獲得に熱中するけれども結局は豫定の計畫に蹉跌を來して野心的目的を達せざるのみならず却つて自國の存在を危うくする虞が生じて來る。今次の歐洲大戰に於ける獨逸は好個の適例と言はねばならぬ。獨逸の極端なる利己的侵略的軍國主義の末路を見たるものは如何なる民族も痛切なる教訓を感ぜざるを得ぬのである。敵國全滅を理想としたる野蕃時代はいざ知らず人道觀念の發達した今日の時勢に於ては如何なる民族も自己のみ思ふ儘に繁榮して他の民族の繁榮を勝手に妨害する權利を持つて居ると主張し得るものは無い。正義人道の本旨から言へば各民族に等しく繁榮の機會均等を與へ各自の實力によりて自由競争をなさしむる途を開かねばならぬ。現今の國際關係に於ては幾多の強國の間に此點に就いて誤りたる考へを抱いて居りながら少しも自

から氣がつかぬまゝで平然として居るものがあるやうである。今日の時勢では如何なる強國も自己の強を恃んで弱小國を壓迫し又は暴虐を加へてはならぬのである。是は人類全體の幸福の基礎たる人道の理想の要求である。此要求を無視するものは人道の敵であり世界の平和を攪亂するものである。

愛國心又は國家主義は自國の利益を圖るのみで少しでも他國の利益を圖るのは直ちに自國の損害を來す非愛國的行爲であるやうに考ふる狹隘な思想は訂正を要するのである。此等は自國の範圍を脱し眼界を廣くして人類全體の上から着眼して人類全體の幸福は其成員たる一民族の幸福と矛盾せぬことを達觀して人道主義の要求を容るる雅量を養はねばならぬ。一民族の利己的小利害は人類の大利害に對して節制をなし得るやうに民族を訓練することが必要である。民

族が人類全體に對して必要なる節制を全然失つて仕舞へば遂に他の民族から孤立して鎖國的利己的排外的となるより外に仕方は無い。是は前にも述べた通りに眞に愛國の目的を達する所以で無い。

熱狂的の愛國者は自國及同族を愛するの餘り外國人を敵視し之を憎み之を輕侮することは愛國心に缺く可らざる要素と考へ又斯くすることが正當なるのみならず必要であると考ふるものがある。是は祖國と外國とは全然利害相反し氷炭相容れざる敵味方の關係の如く考ふる所から起るので前に述べた人道の觀念を缺いたものである。人類の連帶責任の思想なきものである。人類共存の理を解せざるものである。同族の間に於て不徳に數へらるゝ憎惡又は驕慢が外國人に對する場合に限つて特に國民道德と言ふ美名の下に賞讃されねばならぬと言ふ道理はあるまい。自分の考では國民道德は人道の根本

から出で來るもので人道に反し人道に矛盾して愛國心又は國民道德が存在せねばならぬと主張するとは人間の理性の許容する能はざる所であると思ふ。明かに人道に矛盾する行爲を愛國的行爲と認め又は大に之を賞讃するところがあるならばそれは偏狹固陋の愛國心に出でたもので眞正の愛國心とは言はれまいと思ふ。其行爲は表面愛國的に見えて其實に於て愛國の目的に反するものであらうと思ふ。即ち極端なる利己的鎖國的國家主義に出でたるもので結局民族の運命を危険に導くものであらう。敵を憎むは已を得ざるに出づる事で吾人が敵を憎みても尙且つ是認さるゝのは敵が正義人道に反する時に限るのである。吾人は惡を憎み得るのである。我民族が世界を敵とし世界を憎み得る場合は全世界が皆誤つて正義人道に背き我國のみ孤立して正義人道を踏む時に限るのである。併し斯の如き場合は容易

にあり得ないのである。故に平時に於ては世界の列國は國際の關係を親善にし出来る限り人類全體の幸福を増進するに協同せねばならぬ。是れが人道的國家主義の本領である。人道的國家主義は常に正義人道に與する愛國を要求するのである。其結果として同族の行爲であつても正義人道に矛盾せんとするときは斷然之に反對するのが眞に愛國の目的に適ふと考ふるのである。斯の如き人道的基礎があつて始めて所謂國際聯盟が成立するを得るのである。國際聯盟は決して愛國心を撲滅し民族自覺に矛盾するものでは無い。否之に反して人道主義の基礎によつて此等の國家的精神を確保し各民族の存續を完うせんことを期するものである。尙一步を進めて考ふれば、眞正の愛國心なく民族的自覺なければ正義人道の主義に出でた國際聯盟も無意義に終つて仕舞ふと思ふ。要するに自分は人道主義と調和す

る民族的自覺が眞正に愛國の目的を達し民族的自覺に本づく人道主義が眞に人道の本旨を完うするものであると確信するものである。

更に着眼點を轉じて一民族の文化と人類全體の文化との關係より考へて見ても各民族は孤立す可らず互に敵視す可らず相共同協力せねばならぬと言ふことが極めて明瞭となつて來る。換言すれば民族本位主義から言へば當然自國の文化の進歩を圖らねばならぬと同時に人類全體の文化の進歩を圖らねばならぬのである。即ち民族主義は一方に於て是非共人道主義を以て補はねばならぬのである。同一民族は其民族に固有なる同一文化を有することが原則であるけれども、遠く其文化の由來を尋ねて其の源流に遡つて見れば何れの國の文化も決して其民族一己の力で作り出したものでは無い。一民族の精神生活の内容は種々の方法によつて種々の徑路を通つて他の民族か

ら得來つたものが混入して居るものであつて、如何なる民族も自己の文化が悉く自己民族の内部から發生したものであると主張し得るものは無いのである。民族の文明發達の歴史を研究して見れば民族間に文化の交換が行はれて居ることは實に驚くべき次第である。一寸考ふれば一の民族は他の民族から全く獨立して居るやうに見えても其實は他の民族と大規模の共同生活を營んで居るのである。各民族の文化が今日の状態に達して居るのは他の民族と此大規模の共同生活を營んだ結果に外ならぬのである。自國の文化が他の民族との交通によつて發達し來つた如く人類全體の文化も矢張り各民族の共同協力によつて進歩發達したものである。即ち人類全體の努力の總計が人文の進歩發達となるのである。斯の如く考ふれば人類は全體として一個の文化團體を作るものであつて各民族は此文化團體の成員

であると思ふことが出来るのである。人類の文化はつまり各民族の文化を綜合融通した結果であるから民族相互の間には共通の文化が多くなければならぬ道理である。各民族は孰れも均しく人類であるから文化には共通の要素があり共通の根柢があるのは當然である。然るに民族が異なれば文化が根本から異なるやうに考へ又は自國の文化と他國の文化と全然無關係の如く考ふるのは大なる偏見である。現代の文明社會に生息するものは古今東西の民族の努力を綜合して出來上つた人類共通の文化の恩澤に浴して居るから、民族を本位とするときには自己民族の文化の進歩を圖らねばならぬけれども人類文化團體の一員としては人類全體の文化進歩の爲めに何等かの貢獻をなすべき責任があるのである。之が文化上の人類の連帶責任である。汽船汽車電信電話電燈電車自動車瓦斯等の如き他國人の發明に係る

文明の利器の恩澤に浴する計りで自分には少しも研究もせず發明もせず又研究しようとも發明しようともせず世界文化の進歩に貢献しようとする意思を缺いた民族が若しあつたとすれば、之を世界の公平なる判断に訴へたならば如何なる判決を受くべきであらうか。是は固より言ふまでも無き事である。如何なる民族も人類全體の文化の進歩の爲に貢献しようとするのは人道の精神である。自國の發達の爲に自國の文化の進歩を圖るのは民族的自覺の發露である。けれども夫れのみにてはまだ不十分である。其一面に於て人道主義によつて之を補はねばならぬ。自分の考ふる所によれば文化上の人道主義は政治上の人道主義よりも遙に行はれ易いものであつて民族生活に於て實際に行はれて居るのである。學術技藝に國家の境界なしと言はれて居るのは既に周知の事實で生活の必需品の如きも世界各国有

無相通じ風俗習慣等も次第に世界共通のものが増加して來る勢あることは掩ふ可らざる事實である。一民族が其文化の上に狹隘固陋の似而非愛國心を振り廻はして外國文化排斥の態度を採れば其進歩の妨害となることが少く無いと思ふ。

民族的自覺の第五の要素として民族自己價値の自覺を擧げ民族の自尊心が其發達進歩を促進する所以を述べたのであるが此に就いては少し注意を要する事柄がある。それは他の事でも無い。若し此自己價値の自覺が極端に走れば排他的鎖國的となりて人道の主義と矛盾するやうになり却つて本來の目的に反するやうになることである。民族自己價値の自覺が其の絶項に達すれば自國の文化が最上であるから最早他國の文化を學ぶ必要なしときめ込んで排外的となり鎖國的となり驕慢になつて尊大となつて他國の文化を輕蔑し無視するや

うになれば其國の文化は孤立して其結果進歩が停滯して漸次退歩に傾くやうになるのである。之は愛國の精神から出でたやうであつて其實は愛國に反した結果を生ずるのである。お國自慢は自信や自尊心を作つて民族の發展を鼓舞して居る間は結構であるけれども天狗になりすまして仕舞へば遂に思はぬ不覺を取らねばならぬ羽目に陥ることを覺悟せねばならぬ。自國萬能主義は考へ物である。

自國の風俗習慣其の他一切の文化は其の民族に取りて何であつても極めて自然であり當然であり上品に且優美に見ゆるのは愛國心の自然の發露である。又自國のものと異なるものは何であつても不自然であり異様であり滑稽であり野卑であり劣惡であるが如く感ずるのも愛國心の衝動の然らしむる所である。衣服飲食家屋器具風俗習慣行儀作法言語動作等について一々考へて見れば思ひ半に過ぐるも

のがあらう。外國の文化の自國と一致するものを賞讃し異なるものを悉く排斥するのは極めて幼稚の愛國心の發露である。他國の文化を理會し之を尊重し彼の長を採りて我が短を補ふ様になるのは民族の思慮や修養の結果であつて之が真正なる愛國心の發露であると言はねばならぬ。自國の文化を愛する如く他國の文化を尊重するは進歩したる愛國心であつて自から正義人道の道に適ふものである。要するに極端なる民族的自尊心は不健全なる愛國心と言はねばならぬ。他の民族の文化を排斥輕侮し傲慢不遜の態度を以て他の民族を睥睨し又は其の文化の幼稚な事や缺點短處を指摘列擧して非難攻撃すれば其の結果として自然我國の文化の價値を向上せしむるが如く考へ又外國文明を憎み嫌ふことが愛國者の義務の如く考ふるのは卑怯の沙汰と言はねばならぬ。又さ程世界に價値を認められて居らぬ自國

の文化を自畫自讃して徒らに聲を大にして廣告するのも劣等民族の宣傳に見る所で必ずしも自國の地位を高め又其の進歩に効果があるものとは思はれぬ。要するに幼稚なる排外思想は不當不合理に陥り結局自國の不利に終つて仕舞ふ事が多いのである。

幼稚なる愛國心は排外思想を生ずると共に民族の海外發展を厭ふ情を生じ易いのである。此點に就いても民族的自覺は人道的要素を加味すべきである。民族の海外發展を圖らんとするには自己を主張する爲めに他國に盲目であつてはならぬ。自己の長處を自覺すると同時に他の民族の長處を認めて之を理會し之に敬意を表するに客であつてはならぬ。要するに今日の時勢に於ては民族の鎖國的根性を脱して世界的國民たる雅量がなくてはならぬ。世間見すの我儘勝手を止め度胸を大きくし正々堂々と他の主張に耳を傾くると共に自己

の主張すべき所を主張せねばならぬ。只管民族の對内關係のみに没頭せず民族の世界に於ける位置を理會して爲すべき所を考へなければならぬ。一方に於て時勢の要求によりて人道主義を尊重し世界市民主義を認むると共に一方に於ては今回の世界大戰によつて覺醒を促されたる民族的自覺を確保して行かねばならぬと思ふ。

#### 四、愛國心の心理

民族的自覺と人道との關係に就いては此位にして置いて自分は最後に愛國心の心理をザツト考察して其教養に就いて一言して見度いと思ふ。愛國心を一の心理作用と見れば知情意の三方面に分つて觀察して見ることが出来る。愛國心が本能的に現はれて來るのは情的方面である。即ち民族的自覺は先づ民族的感情又は愛國的感情とし

て表はるゝ者で其幼稚の状態に於ては本能的衝動的で、刺戟あれば直ちに行動し思慮分別を用ふる餘裕が無いのである。民族の加害者と見れば全員直ちに立ちて敵を攻撃し一致團結の行動を爲すのである。是は取りも直さず民族保存の本能の發現である。けれども周到なる思慮分別を欠き必要なる準備なくして戦ふたる爲に敗北し又は真に民族の利害に關するや否やを確かめずして軽々しく無用の戦を起して民族の自滅を招くことがある。是は一個人で言へば短氣な思慮分別のない男が人から氣に入らぬ事を言はれるか或は早合點して全く他人の心を誤解して直に手を振り上げて跡から仕末に困るやうなものである。此等は本能的愛國心とも稱すべきであつて其目的とする所は自然に民族の保存にあることは明かであるけれども感情の激する所に従つて輕舉妄動すれば一時愛國的感情は満足されるけれども先

先の事を考ふれば民族保存の目的に反することがあるのである。民族自己の價値を過信して誇大妄想に陥り排外主義となりて他の民族の反感を招き又は侵略主義や主戰論に囚はれて熱狂的愛國者となり不必要の戦争を起して國家を危険に陥らしむる如き又は人種的偏見に魔せられて他國の嫌疑誤解を招くが如きは皆愛國的感情が極端に走り理智の指導を缺いた場合である。本能的愛國心は感情に走り理性の思慮分別を缺く爲めに愛國の本能に出で、愛國の目的に反する結果を來すのである。斯の如く情緒の爲めに誤らるゝ愛國心は盲目的愛國心と言はねばならぬ。それであるから愛國心をして真に愛國の目的を達せしむるには何時迄も本能的衝動的感情的の幼稚なる自然状態では行かぬ。之を正路に指導する爲に理智の陶冶を要するのである。詳しく言へば愛國的思想と愛國的智慧を要するのである。愛



國の情如何に熱烈であつても、如何にすれば眞に愛國の目的を達するかと言ふことは感情の作用では判断がつかぬ。此判断は愛國の熱情に冷靜周到なる思慮分別が伴はねばならぬ。幼稚なる愛國心を本能的愛國心と名くるならば此を知的愛國心又は理性的愛國心と名くることが出来る。本能又は感情は本來衝動的盲目的であるから理智の指導制御を必要とするのである。民族保存の本能より出でた愛國的感情が理智の指導によつて始めて正確に本來の目的を達することは自己保存の本能たる飲食本能すら理智の指導を必要とすると同じ道理である。從來愛國心の鼓舞教養は主として感情的方面に傾いて居つたが今日の時勢から考ふれば徒らに愛國的熱情を鼓吹した計りでは不十分である。此知的陶冶の方面が極めて大切なものとなつて來るのである。

愛國的本能即ち民族保存の本能は愛國心の本質であり原動力であるから盲目的感情的であるからと言つて極端に之を抑制し過ぎて遂に之を撲滅してはならぬ。此本能は民族の感激性や興奮性の根本であり民族の氣慨又は敵愾心の宿る所であるから自國を愛し祖國の爲に盡さんとする本能的感情は決して之を抑へてはならぬ。愛國的熱情を抑ふることなくして如何にすれば眞に祖國の爲になるかと言ふ思慮分別及其材料となるべき知識を與ふるを必要とする。民族に何時にても民族の爲に戦死すると言ふ意氣と覺悟とがる必要である、必要の無い時に戦死するのは眞の愛國者と言はれぬ。理性的愛國心は能く前後の關係を顧慮して眞に戦ふ必要な時には國民が勇んで戦はんとしても國民をして戦はしめず、本能的愛國心の命令と正反對になることがあるのである。けれども分別が過ぎて敵愾心が無くな

り民族の爲に戦死する意氣が亡びて仕舞へば理智の爲めに愛國心の本質が殺されて仕舞つたのである。是は大に警戒すべき點である。

愛國的思慮及愛國的知識の範圍は極めて廣汎である。如何にすれば眞に愛國の目的を達するかと言ふ問題を解決するに必要なる理智の作用のあらゆる方面を包含するのである。民族生活即ち國民生活の各方面に通ずる必要條件を網羅しなければならぬ。詳言すれば内外の經濟的・政治的・社會的・事情に就て徹底したる知識と見識とを必要とするのである。國際的關係は勿論正義人道の觀念を明確にして居らねばならぬ。前に述べた人道と民族的自覺との關係の理會の如きも畢竟此事に屬するのである。愛國心は此知的方面の陶冶を缺いては決して完全のものとは言はれぬ。一國の外交上・内政上・産業上・社會上の安寧幸福を得るには如何に熱烈な愛國心があつても此方面に關す

る思慮と知識を缺いては不可能である。我國民の如きは概して此方面の素養が薄弱である。我國民一般に外交的知識・政治的・經濟的・社會的知識が缺乏して居つた事は此等の方面に於て是迄幾多の損害や失敗を招いたのである。愛國心も感情計りでは如何に熱烈であつても國家に及ぼす効果は十分とは言はれぬ。其の知的方面の陶冶は實に大切なものである。

前に民族的自覺の要素として列挙した(一)同族意識(二)同國意識(三)同語意識(四)同一文化の意識(五)民族自己價値の意識(六)民族連帶責任の意識に就いて徹底したる理會と自覺とを作るには結局前に挙げた知的陶冶に待たねばならぬ。此知的陶冶は民族的自覺の根柢を明白に建設するのである。幼稚なる本能的衝動的の感情的の愛國心には以上の六方面の要素が明白なる根柢を持つて居らぬ愛國心は如何に熱烈

であつても其根柢が出来て居らねば恃むに足らぬのである。本能的感情的又は傳統的の愛國心は時勢の變動又は批評的考察によりて懷疑的氣分を生じ動もすれば其根柢が動搖して来る。故に民族の生存を確保する民族的自覺を作るには其根柢に就いて知的陶冶が必要である。民族的自覺の根柢は即ち前に挙げた六要素で所謂愛國心の根柢である。此根柢につき徹底したる理會と自覺とを得れば如何なる社會の變動に遭遇しても如何なる思想に襲來されても何等動搖を來す憂は無いと思ふ。愛國心の教育に就いては情的方面の鼓舞獎勵も極めて大切であるが知的方面の徹底的陶冶は更に大切なるものと言はねばならぬ。

民族をして結合統一して真に其獨立を完うせしむるには愛國的感情と愛國的思慮及知識とのみではまだ十分とは言はれぬ。此等の感

情や思慮や知識は何時にも愛國的行爲となつて實行に表はれ得るには意志の訓練を必要とするのである。此意志の訓練を缺けば愛國の目的を達するに必要な意志活動が十分とは言はれぬ。従つて愛國の目的を達することは出来ぬ。愛國心は國家に對する情操及理智の作用ばかりでは不完全である。情と智とは實行の意志が伴はねばならぬ。結局知情意の三方面の陶冶が徹底せねば愛國心の教養は十分とは言はれぬのである。

##### 五 愛國心の教養

國民教育は世界孰れの國にありても國民の愛國心を喚起し之を教養することを以て其重要な任務となして居る。此任務を完うするには現代の教師は先づ時勢と愛國心との關係を明かにして愛國心教

養の出發點を發見せねばならぬ。即ち國民生活に於ける民族的自覺の意味を會得せねばならぬ。次に愛國心即ち民族的自覺其物の根柢に就いて明確なる理會と自覺とを持たねばならぬ。殊に愛國心の知情意の三方面に對して適切なる陶冶の方法を講ずることが必要である。今日の時勢は民族的自覺が必要であるからとて徒らに聲ばかりを大にして特別の施設を考へ又は愛國と言つて無闇に押賣したからとて必ずしも功を奏するものではない。餘りに人工的に強制すれば却つて反感を生ずるものである。愛國心は教育に先つて民族の本能に其根柢を持つて居るものであるから此自然の愛國的感情の共鳴を促してまだ眠つて居るものなら覺醒させて愛國心の發達を最も無理の無い自然の方法で鼓舞獎勵して行くのが最も有效であると思ふ。愛國心の教養は白紙に墨で字を書き又は白い絹絲を思ふ儘の色に染

めるやうに考へてはならぬ。丁度生きものを其本性に逆はずして育て上げる心掛で無くてはならぬ。つまり民族天賦の民族保存の本能即ち民族的感情即ち愛國の本能から出發して行かねばならぬ。民族の歴史や文學其他の課業及學校生活の種々の場合に於て民族本有の愛國的感情を喚起し之を培養する機會が少く無いのである。つまり民族の内心に潛在して居る感情を共鳴せしめ自然に之を發揮せしむるのである。愛國心の本質は感情であるから之を涵養することが第一着でなければならぬ。愛國的感情は授くべきものではなく鼓舞すべきものである。押賣すべきものでなく喚起すべきものである。此感情を基礎として知的陶冶及意志の訓練を施すべきものである。就中知的陶冶に就いては確乎として動す可らざる論理的根據の上に立ちて時勢の要求に就いて最も深い理會を持たねばならぬのである。

果して斯くの如くしたならば時勢に適應した愛國心即ち民族的自覺を得しむることが出来ると思ふ。

あらゆる自覺は自發的自認的なる所に本領がある。民族的自覺は強制によらず押賣によらず注入によらず民族天賦の本能から出發して指導宜しきを得て此時勢に處するには斯くなければならぬと民族自ら徹底的に自證自認するに至らしむるを期すべきものであると思ふ。

## 第二章 人道と國民道德

### 一、人道及び國民道德の意義

前章に於て民族的自覺を論ずる際に屢々人道と國民道德との關係に觸れたのであるけれども重複を厭はず今特に章を改めて一層深く考へて見度いと思ひます。私は平素主に教育學を研究致して居りますが過去十數年來教育の説を立つる上に國民道德に就いて如何なる見方をして居るかと云ふ私の立場を述べて見度いと思ひます。教育の議論は色々の説が澤山にありまして、又之を論ずる方法も一様ではありません。或は純粹に哲學的の上から往く人もありますし、又成るべく事實に基いて科學的の立場から論ずる仕方もあると思ひま

す。私は餘り哲學の方に這入らないで、教育學で論じます範圍内に於て最近色々進歩しました社會學、それから心理學、倫理學、斯う云ふ上の立場から我國民道德の問題を考へて見たいと思ひます。此に人道と國民道德と題しましたけれども、此人道と云ふ意味と國民道德と云ふ意味とを色々に違つた意味で用ゐますので、議論が中々果てしが付かぬのであります。

それで先づ第一にどう云ふ意味で國民道德と人道と云ふ二語を用ゐるかと思ふことを申述べて見たいと思ひます。人道と熟字に致し、或は博愛的人道とも用ひまして正義とか博愛とか平和とかさう云ふことばかりを指して人道と云ふやうに使ふ人が大分あるやうに思はれます。それも私は正しい使ひ方の一つと思ひますが、私は茲にもう少し廣い意味で、人道は讀んで字の如く、人の人たる道、即ち人として人類

共通の道、即ち普遍的道德である。と斯う云ふ意味で、用ひ度いと思ひます。博愛或は平和、或は正義と云ふのは孰れも人道の中に包含せられ而も其の大切なものであることは何人も反對の出來ぬ所である、兎に角人類共通の道德、何所へ往つても同一である所の道德を指して私は人道と名を付け度いのである。其次に國民道德と申しますのは、是も丁度讀んで字の如く、私は國民の行ふ所の道德、斯う云ふ廣い意味に使ひ度いと思ひます、此國民道德に三通りも四通りも非常に廣い意味と狭い意味との使ひ方がある。一部の人は國民道德を極狭い意味で例へば特別に國民として守るべき所謂對國家の道德又は我日本國民に固有なる道德と言ふ意味に解釋して忠君愛國道德の異名のやうに考へて居る人もある様でありますが、私は其用法に従ひ度く無い。私はもつと廣い意味で詰り國民道德は國民が行ふ道德の全部を指し度

いのである。人類共通の道德として人道と言ふ事を考へますれば夫れは詰り抽象的の道德である。此抽象的理想道德たる人道を實際に國民と言ふ資格で行へば夫れが國民道德となるのである。國民の行ふ道德即ち具體的の人道——詰り言換へますと人道を國民が行へばそれが即ち國民道德である、斯う云ふ私の考へ方であります。詰り道德は本來人類共進のものであり其目的は人類全體の平和とか幸福とかであるべきもので之を達する爲に正義又は博愛を行ふと見るべきものと思ふ。それで人道は本來一般ののものでありますから之を一般的に理論的に研究致しますれば、是が即ち倫理學と云ふ學問の對象になります、尙ほ進んで哲學の對象とすれば即ちそれが哲學の對象、それから又宗教に於ても同様に人道を以て對象とすることが出来る。此等は孰れも假りに國家の境界即ち國民の區別を離れて論ずる事が出

来る。併し特殊の國民と言ふ資格で行ふ道德には一般道德が具體的となる爲めに種々の國家國民に特殊の事情が加はつて来るから、最早人類共通に論ずる事は出来なくなる。

國民道德は實際問題である。是は即ち國家に處する國民實踐の教であります。國民道德は固より實際的の教であるけれども之を理論的に研究しやうと思へば無論出来やうと思ひますが、併し國民の特殊の國民道德を少しも違はず其儘に他の國民に行はしめやうとすれば或は差支を生じて、或は不適當の場合が生ずるであらうと思ひます。一方は抽象的で一方は具體的である、一方は理想、一方は現實である、一方は普遍的で一方は特殊のである。斯う云ふやうに私は考へて居ります。併し私は人道と國民道德とを二元的に考へ人間は二筋の途を行かねばならぬやうに考ふるのでは無い。國民道德は人道を具體化し

たものであるから、國民道德を完うすれば同時に人道を完うするものであると確信するのである。即ち人道の理想は國民道德に於て實現され又國民道德の中に現實の人道を認むるのである。結局道德の本質は唯一で人道の理想にても現實の國民道德にても共通でなければならぬ。結局國民道德は國民の行ふ人道である。國民の實踐道德である。國民の修身の道である。それで私は之から國民道德は國民が人道即ち一般道德を實現するのであると云ふ事を辯明し度いと思ひます。それで先づ人類共通の要求たる道德即ち人道とはどんな道德であるかと云ふことを少し考へて見たいと思ひます。

## 二、文化と道德

さて社會の文化の中から假りに道德だけ引離して獨立に考へましたら色々の考へ方があります。全然主觀的の哲學的思索で自我から演繹しますれば自分の思ふやうに又自分の満足するやうに統一した又徹底した説を立つることは必ずしも困難ではありません。私は道德と云ふものは一方には主觀的事實たると共に又一方には客觀的事實として嚴然として社會に存在して居ると思ふ。假りに自我の主觀的立場から離れて之を自我の外界に存在する所の客觀的事實の立場から考へて見ますと、道德は詰り社會の文化の一の方面であると思ひます。詰り人間の精神が造り出す文化の一方面に道德と云ふ現象があるのである。文化の他の方面を申しますれば例へば經濟とか政治、言語、風俗、習慣、それから宗教、學術、技藝、或は美術、文學等さう云ふものである。それに今の道德を入れて之を總稱して我々は文化と申すので



ある。夫等を列べて考へて見ますと道德は其一つである。之を人類發達の歴史の上から考へて見まして、斯う云ふ所謂文化と云ふものは始めから今日の状態であつたものでない。人間が極めて野蠻的生活をして居りました時には、今日に見るやうな斯う云ふ文化を見ることは出来ない。今日見る所の文化は經濟、政治、言語、風俗、習慣、道德、宗教、學術、技藝等の孰れに就いて考へましても初め極めて幼稚の状態からして漸次に發達して来る。然らば其人類の文化と云ふものは何故發達せざるを得なかつたらうかと云ふことを今日から推して考へて見ますと、それは哲學的に申しますれば則ち一の假定をなすより外はありません。之を仔細に論じますれば餘り横道に這入りますから、私は單に假定として論じます。詰り人間は他の動物と違つて所謂理性を有つて居る。理性は人間の現在の生活状態を以て満足して居られぬ、今

の生活状態を段々善くなさうと要求する、現在の生活状態を善くしよ  
うと云ふ天然の要求を理性が有つて居る。それで理性は段々向上發  
展しようとする。段々努力して詰り理性の所謂向上發展の努力と云  
ふものが次第々に積重なると云ふと、詰り我々の生活状態は即ち物  
質的に於ても、精神的に於ても生活状態が段々と向上して現在より善  
くなつて来る。その段々積重なつたのを我々は文化と申します。  
さう云ふ風に見ますと云ふと、道德と云ふものは始めから一定したも  
ので無くて段々に進んで來たものである。詰り理性は段々人類が發  
達すると共に次第に發達し覺醒して來たものである、さう云ふ風に見  
るのが詰り社會的見方で事實に基いて居る。どうも科學的にはさう  
見る外仕方がないのであります。そこでそれではさう云ふ文明が段  
段發達して來て何んになるか、それが最初の問題に又後戻りをして來

ましたが、詰り現在の状態に満足しないでより良くなりた、詰り理性が或物を求める、求めるから段々欲求を満足させる、或程度まで満足して、それでまだ満足が出来ない、又それより更に以上の物を求めようと次第に進んで来た結果、詰り文化發達の歴史はまア一方から見ると理性が求めた欲求の歴史即ち理性欲求満足の歴史であると斯う云ふ風に見ることが出来る。さう云う立場から云ひますといふと、詰り此文化が進んで行くのは何を目的として居るか、と云へば、詰り理性が満足を追求して居るとである。それなら理性が自分の欲求を満了したならばそれを何と云ふか。是が即ち所謂幸福即ち理性の満足と云ふものである。即ち自己満足である。内心の満足である。詰り欲したる物を得た貌、思ふ所を達したる心地、是が我々の幸福である。幸福は無論物質的幸福、例へば咽喉が渴いて水を呑みたくなる、丁度水が欲し

くてたまらぬ時に水を呑んだ愉快な心持、其他我々の物質的の欲望を満足した精神状態、是は我々の通例の物質的幸福と申しますけれども、段々人類が進みますと、もつと高尚の幸福を要求する。高尚の幸福を生ずる。欲望の目的物は必しも品物ではない、品物ではないが何か無形の精神的のものを欲求する。而も無形のもの、品物ではないが何か無すると同じく精神上満足を得る。是は矢張り物質的幸福と同様に我は幸福と云ふ。精神的欲望を達して得たる幸福は即ち精神的幸福である。それでは社會全體が進んだらばどう云ふ事になるかと云へば、詰り社會全體の人が最も多く高尚なる幸福を受けるのである。之を逆にして言へば、詰り我々はさう云ふ社會を指して社會が進んだとか、或は文明が進んだ、或は詰り人類が進歩した、斯う云ふ風に言ふのである。さうしますと云ふと、詰り人の進み行く目的は何所にあるか、

言換へますと、それが社會的に考へました所の所謂人生の目的、此人生の目的、と云ふものは結局人類全體の幸福であると言ふことが出来る。私は無論此幸福と云ふことも、哲學的に論じますれば中々言ふべき事多いのでありますが、簡單にする爲に私は幸福主義の立場を以て是からお話をすると云ふことを豫め申上げて置きます。

此の如く人生の目的を社會全體の幸福であるとするならばそれと個人の幸福との關係はどうであるか。更に進で考ふれば個人と社會との關係はどうであるか、と言ふことを考究して見度いと思ふ。此點は最早言ひ古るしたやうに私は有機的に之を考へたい。社會全體——即ち社會の人類全體が文明に進歩して行かうとする爲には個人が發達して行くことが必要なる條件である。個人が發達しなければ社會全體は發達して行くことは到底望めない、又個人が發達して行く爲

には社會の進歩が必要であります。例へば教育を一つ受けやうと考へても、容易いことで、個人が教育を受けて大いに發達進歩して行かうと思ひましても、社會が進歩しなければ出来ない。例へば阿弗利加の砂漠の中に生れ、或は中央亞細亞の真ん中の學校も何も無い地方に生れたとする、さうすると如何に自分が發達をしようと思ひましても、適當な教育を受けることは出来ないであります。尤も哲學的に考へて禪宗の坊さんの悟りは不立文字で文字も何も無く、直ぐに大悟徹底するやうに考へますれば出来ませうが、併し今日の社會では文字を知らずに世に立つて行くに十分と云ふ事は有り得ることではない。つまり一般的に云ふときには、個人の才能を伸ばす上から申しても、或は徳性を涵養する上から申しましても、それは人間が生れた時に持つて來た天然の力を誘つて行く所の其の機關が外部の社會に備つて居

らぬと云ふと、其の發達は不完全であります。早く申しますれば、詰り社會が進歩しないで教育機關が備つて居らぬと、個人が大いに發達進歩して行くことは全然出來ぬことは無いが非常に困難であります。それで唯今申した通り、個人が發達して行く爲にはどうしても社會が進まなければならぬ、社會が進む爲にはどうしても個人と云ふものが進んで居らなければならぬ。個人の進むと云ふことが即ち社會進歩の要件であります、唯だ社會は個人の發達を離れて空に進むと我々は考へることは出來ない。さう云ふ風に社會と個人の二つが相互に絡まり合つたものと考へて見ますと云ふと、個人の道德の價值と云ふ事も同様に個人ばかりで決まるものでない、と云ふことが自から分ると思ふ。詰り個人と社會と相關聯して居るので、相關聯して意味を爲して居る、例へば個人で自分の目的を達しようとしても、社會から離れて

目的を達すると云ふことはどうしても出來ない。社會の中で社會の力を藉りて、さうして社會の目的と相調和して行つて始めて自分の目的を達することが出來ます。社會の目的に矛盾した個人の目的は一時達せらるゝやうでも何時か障礙を生じて來る。それと同じ様に個人の價值と云ふものが出て來ますのは、矢張り社會に於て始めて出來て來る、例へば道德の價值、又は徳性の價值のやうな所から考へましても、考へ方に依て全く社會を離れて山の中へ一人で這入つて、座禪の修養をして遂に大悟徹底すればそれで其自身に價值があるやうに考へられますが、さう云ふ修養をした價值は……其人が假令山の中で修養をしても構はない……つまり其人が一生涯山中に隠れて居つたのでは發揮されない。之に反し社會に出て色々な人に接し又社會で色々な仕事をする時に其修養をした價值が段々出て來るのである。

其價値の判断も本人の判断よりも社會の判断によつて定まるのである。個人の道德の價値と云ふものは結局社會に於て始めて發揮されるものである。詰り道德の價値と云ふものは本來社會的のもので、詰り道德の評價と云ふものは社會に共通なる道德の標準に照すことに依つて決まる。假令自分は善い人であると自分だけで決めて居つても、決してそれで道德の價値があると云ふ譯ではない、言換へれば社會に存在して居る所の價値標準、誰も承認して居る價値標準に依て始めてその價値が決められると私は考へます。さう云ふ風になると詰り道德の標準と云ふものは各人の良心の命令となつて現はれるものであるけれども本來社會的のものであつて、個人が勝手に作つたものでも無く又臨時の出鱈目の思ひつきでもなく人間に共通なる本性に基いて嚴然たる社會的基礎を有するものでなければならぬ、さうして個

人の行ひが善であるかないかは個人の判断のみでは間違ふ事があり結局人類共通に考へた一般的普通の社會的標準に合ふか合はぬかと云ふことに依て決定されるものであると言はねばならぬ。さう云ふ所からして道德と云ふものは一般的のもので、普遍的性質を持つて居るのである。道德の權威に服従するのであるけれども之は個人の任意の道德標準と言ふことでなく良心の命ずる道德はやがて此普遍で標準であると言ふので始めて道德の權威であり又良心の權威であり得るのである。さう云ふ風に誰に取つても善であり、どんな人でも、何處へ行つても夫が善になると云ふ譯で、道德は一般的性質と權威とを持つて居る譯であると思ふ。例の大哲學者のカントは行爲の格率は個人の行ひが丁度一般的法則になるやうにせよと申したのであるが、私が茲に申したやうに個人の行爲が一般の法則、即ち何所へ行つても

それは違はないやうになればそれが道德であると思ふ。さうなれば先刻申したやうに社會の何所へ行つても道德と承認されるのである。即ち社會一般に承認した道德の標準と一致する所以であります。畏れ多い次第でありますけれども教育に關する勅語の中に「之を古今に通じて謬らず中外に施して悖らず」と宣うてありますのも私は此道德の普遍性の意義と拜察致すのである。

### 三 人道の基礎及び具體化

所がそれぢやさう云ふやうな普遍的の道德は本來何所から生れ出で夫れが我々に知れて來たものであらうかと云ふことを更に遡つて考へて見ますと、私の考では……心理的發生的の之を考へて見ますと……人類の間に一番先きに、何時道德が現はれて來たかと申しま

すと、是は親と子の間であると答へ度いと思ひます。其中に就ても母親と自分の育てる子供との間に現はれて來た所の道德、即ち動物にも共通なる親の本能から發達した。其間に自然に現はれた感情を基礎として、理智の覺醒と共に漸次之によりて指導された行爲の標準が最初の道德であると思ふ。通俗に言へば母の慈愛である。それが一番先きに人類生活の上に於て最初の道德と言はるべきものであると私は信じて居る、細かく申し上げますと色々ありますけれども個人が自己の快樂のみを行爲の標準とせず自己の利益の一部を割いて他人の爲にすると云ふ利他的行爲の起源として自分は母子の關係を以て最も適當と考へるのである。一方自分の爲めばかりでなく、詰り自分の幸福ばかりでなく、他人を考へる利他的の動作、此利他的働きを他人の教を待たずして天然にするのは何時するかと云ふと、是は母親が子供

を育てる時である。母子の関係を離れて天然に任せますと、動物は大抵利己的動作をする。強い者は弱い者の肉を食ふと云ふやり方をす。それから同胞兄弟などでも、動物にありましては互に競争する。鶏を飼ひましても能く目撃する所であります。併し母親が子を育てる場合には強食弱肉の競争や利己一方の立場をすて、子の爲に利他的行爲を爲します。動物に於ても之を見ることが出来る、人間に於ては最もそれが著しいものであります。親が若し食物が少し不十分である、即ち親と子と十分食べることが出来ない、と云ふ場合があつた時はどうするかと云へば、母親は自分の食物の一部分を割いて、詰り自分は不足を忍んで、さうして子供の方に十分に遣つて子供が満足に育つやうにする。其他或は危険が襲うて来た時に自分の命を捨てるか、子供が命を捨てるかと云ふやうな危険に遭遇する場合には、母親はどう

するかと云ふと先づ自分の身を犠牲にしても子を助けようとする、即ち犠牲——利他的もう一層進んだ犠牲的の動作と云ふことは、是も同じく母親が子の爲に始めて行ふのである。此利他的或は犠牲的行ひと云ふものは、恐らくは最初人間が殆んどさう云ふことを考へない中から、本能の衝動に依てどうしてもさうやらなければならぬと云ふのでやつたに相違ないけれども、段々理性が覺醒しまして漸次人類の道徳的意識となり終に人の務めとして行ふやうに發達して來て、遂に人道の最も高尚なるものとせらるるに至りました、動物の母子の関係も利他的行爲も極めて一時的で子が生長して獨立すれば其關係は忘れて仕舞ふ。而も母親の利他的行爲も無自覺の本能的動作に過ぎぬのである。人間の母の愛は本能から出發して理性の要求によつて漸次高尚の域に進んだものである。彼の佛教の觀音の慈悲や基督教の

博愛は絶対の愛とでも申しませう。併しさう云ふやうな理想的の愛と云ふものは、我々は容易に之を具體的に見ることは出来ない。或はもつと違ふ言葉で言現はすならば、理想的の誠であつても同様であります。併し親と子との間の關係に就いて見ましたならば理想的の愛又は誠と云ふことが人間の間にあるとすれば、親と子の中に現はれたものが最も自然で且純潔なものであると思ふ。母子の愛の最も純潔にして偽なく飾なく汚なき所は誠と云ふ言葉で最もよく言現はされる。さう云ふ風に親子の間に若し特別の場合がない以上は、自然に發生しさうして段々其理性が覺醒して來るに従つて自然に發達して來た道德……此道德を以て最も純粹なるものであると、斯う申して宜からうと思ひます。能く言はれることでもありますけれども、我日本でも天理教で神様のことを親様と云ひ基督教で神を父と云ふのは此邊

の消息を傳へて居るものと思ひます。神人の關係を言ひ表はすに人間社會に存在する關係を假りに用ふるとすれば親子の關係が最も適切である。それから基督教では人間全體を神の子又は四海同胞と云ふ言葉で言ひ表して居ります。斯の如く一方には親子關係を現はし、一方には兄弟關係を現はす言現はし方が昔から随分あるやうであります。それは恐らく今のやうなことから起つて來たので、此思想は人道の思想であるから何とでも名稱のつけ様があつたに相違ありません。ぬけれども、それを具體的に言現はすにはどう云ふ風に言つたら宜いかと言ふに、親が子に表はす廣大無邊なる慈悲慈愛が一番手近な早道であると言ふことによつた次第と思ひます。それで私はさう云ふ所からして、人道の一番本はさう云ふ所にあつて、人倫の一番の初めは親子と云ふ關係に基いて、其親子の間に起つた道德が人間に何より先き



に必要で之を個人の幸福から考へましても人類の幸福から考へましても最も根本的の要件であると思ひます。凡そ人間は幸福を求むる、社會も幸福を目的とする。人間が道徳を以て本務と考ふるのは畢竟人類の幸福を企圖するからである。而も親子の道徳に依て生れましたる幸福が人類が先づ享有したる一番純潔なる幸福であると思ふ。親子の間に於ける純潔なる道徳をズツと推擴げて有らゆる人間に及ぼして行つたならば、是が人類の最大幸福である。即ち親子の間、假りに愛と云ふ言葉で云ひますれば、其愛と云ふものが世界一般に擴がれば是が人類の最大幸福、即ち人類の平和を來たすには最も良いと、斯う云ふ考へを生じたのであらうと思ひます。さう云ふ風に私は考へます。道徳と云ふものはさう云ふ工合にして、本來個人の間、殊に骨肉の間に起つて、段々それが擴張して家族の間に及ぼし、もう一つ進んで部

落に及ぼし、次第に人類全體に擴張して、それが理想化して之を人類共通と考へるやうになつた。それが即ち人道であつて、是が即ち普遍的道徳であらうと思ふ。それで人道と云ふものはさう云ふ所から申しますと、詰り人類一般の幸福を目的としたものである。若し人道と云ふものが行はれたならば、社會の人類と云ふものは最も完全なる幸福と云ふものを得られるであらうと云ふのであります。

併しさう云ふ風に考へましたのは、此人道と云ふものは詰り一般のもの、人間一般の道徳として抽象的のものであります。實際其通り行かなければならぬけれども、事實上出來ない。全く理想通り、さう云ふ道徳を人類一般に及ぼさうと云ふことは矢張り抽象的理想に過ぎぬのであります。此理想的道徳を實際行ふ場合になりますと、それが何所も一樣に其通り行く譯に行かぬ。私の考へでは先刻ちよつと

申しました通りの意味合で、人類一般共通の理想を立て、或は宗教の教として、或は道德の教として立てるときには、又大變價値がある。或は慈悲を理想として教へることは貴ぶべき事である。併ながら其理想は人類一般の幸福を目的として居るので其理想が實際行はれて行く上に就ては、詰り二つの事柄に依て制限されて来る。二つの事柄とは何であると申しますとつまり時と處である。即ち時代と國土である。

#### 四、道德の進歩と人道

何んで私が時で道德を制限するかと申しますと是は私が先刻申しました通り、道德は次第に發達して來たものである、即ち道德は發達成長したものであると、さう云ふ風に見ますと斯う云ふことを考へる必要があると思ふ。道德は段々に人の理性が覺醒して來た結果である

と斯う見ますれば、其覺醒には時代によつて程度の相違があると、我々は見なければならぬ。先づ人類は社會生活を營んで生存し得るものであるが其の社會生活が次第に發達して來た。即ち社會の文化が發達して來た。社會生活の發達は即ち文化の發達である。社會生活の發達には時代を要し程度の相違がある。發達の程度は何んであると云ひますと、文化の發達に伴ひ各時代に社會事情が違ふと云ふことである。之をもつと具體的に申しますと云ふと、例へば人道の上から考へまして、例へば正義と云ふ觀念は理想としては一であると言はなければならぬ。併し之を具體的に言へば其時代の實際社會の事情によつて實行上の體裁が變つて來ねばならぬ。即ち正義の理想は一であつても正義の行爲は時代によつて同じく無い。さう云ふのが例へば社會の警察制度が極めて不完全の世に……例へば戰國の世の中に

……於ては惡るい事をして法律で罰せられると云ふことの十分でないことがある、さう云ふ時代に人間の正義心を満足する方法は警察制度や司法制度の發達した今日の文明社會とは大に趣が違ふ。能く引かれる例は復讐即ち親の敵を討つことを善い事として賞讃することである。それが人類社會が進みまして現代のやうに犯罪人を處罰する制度が十分に出來た時代には許されない。昔の社會では大いに敵討を獎勵した。之も矢張り人道の上から人類一般共通の正義の要求から出でたものであると云ふことは、一つに違ひないけれども、如何に正義の要求を行ひの上に表はすかと云ふことが社會の發達に伴つて違はねばならぬ。是は取も直さず道德の發達である。極細かく言へば、言葉は違ひますけれども、例へば愛國心と云ふことは昔も今も同じことである。假りに國家が違つても同じであると斯う假定しま

して、愛國心が如何に實現するかと、もう少し具體的に考へて見ますと、時代によつて違はねばならぬ。例へば幕府の末には尊王攘夷と云ひまして、夷を攘ふことが大變尊王の手段であるが如くに考へた。けれども、今日大正の時代に攘夷が尊王の目的を達する手段と説明する人は恐らくなからう。鎖國時代に於きましては、耶蘇教信者を國賊扱ひにして打拂ふことが大變國家の爲めであると考へられたのです。けれども、今は社會の事情が變つて、社會が發達して來ました、結果、信教の自由が許されて來ましたから、基督教徒を直に國賊呼ばりするのは正當で無い。そこで詰り時の標準から申しますと、人道夫自身に違ひはないことではありますが、人道を具體的に行ふ上には時代に於て違ひを生ずる、さう云ふ風に詰り具體的になると社會の事情が異なるのが時勢が違ふと言ふのである。人道の理想が實際社會生活の上に實現さ

れる時には此時勢の要素がそこに加はる。さう云ふやうに考へましたならば、詰り人類は現代如何なる要求を有するか、即ち現代の要求する道德はどんなものであるだらうと云ふことを考へて見たい。今日は一體社會が進歩したと云ひますが、社會の進歩は何を指すかと言へばつまり社會の文化が進歩したと斯う云ふのである。社會の文化が進歩すると云へば、社會の文化を造出す所の色々の機關と云ふものが段々細かくなる。即ち各部各部が夫れ夫れ段々一層有效の働きをするからである。詰り制度の上から申しますと分業と云ふものが段々行はれると云ふことが其要件であります。分業が進歩したと云ふことは、分業組織が段々複雑になつて往くことである。さう云ふ意味からどうも分業は一方から見ると段々細かに別れる、一方から見ると分業と云ふものは段々別れても、一方から見ますると統一であります。例へ

ば扇を造ります時に一人で以て何んでもやる、骨も造れば紙も自分で漉いて有らゆることをやつて扇を造る、要も作れば繪も描く、夫れでは餘り上等のものは出来ぬ。さう云ふことを手別けをしてやると段々仕事は別れるが、出来上りは良く出来ると思ふ。けれども、全體を統一して居らぬからバラ／＼である。一方から言へば分業が細かく別れて往くと同時に、之を統一することに努めなければ散漫上なる弊がある。それで社會組織を道德の上から考察して見ますれば社會の仕事は色々に別れて往くが、各々の部分に居る者が、夫れ夫れ其任務に對する各自の責任を盡すと云ふことが必要である。どんなに詰らぬ分業を致して居つても、其者は其仕事の責任を自覺して之を善くしなければならぬ、各自が各々責任を重んぜなければならぬ。統一と云ふ上から言へば全體が協同する、斯う云ふことの必要があります。是は一體

分業は各部分の者が責任を重んずる、全體が協同すると云ふことが社會分業組織のある以上は必要である、其責任を協同すると云ふことが人道の要求である。けれども、社會は段々進んで來るもので、分業は益益盛んになつて來るものである。斯う云ふことを特に考へますと、分業が大變盛んになる時代には斯う云ふことが特別に必要である。斯う云ふことから今時代の要素を加へると申しましたので、何も道德上特別の考へ方をするのではない。道德の根本は詰り同一のものであるけれども、時代に依つて時代に適應する爲に、或特別の點が重みに加はらなければならぬと云ふことが生じて來るだらうと思ふ。詰り其時代の道德、まあ假りに時代の要求する所の時代道德、或は現代道德、斯う云ふ名前を附けるとすれば時代道德、或は現代道德は人道と違つた道德があるのでなくて、人道に時代の要求を加へたもの詰り時代の色彩を帯びたる所の人道であると、斯う云つて宜からうと思ふ。時代に依つて道德に制限を附けると云ふことは、本質の變つた主義の違つた道德が出て來るのではない。特殊の人道が特別に其時代に限つて行はれると言ふのではない、人道が時代に應じて稍色彩の異なつた形を取るものであると私は考ふるのである。

### 五、國民道德と人道

其次に此人道の行はれる國土の制限、是は詰り具體的に申しますれば、國家の制限を受けることになる、道德の上に時代が要求すると同様に國家の要求がある。人道の實行上時の要求、國家の要求、此二つを加へたのが實際道德である。一體道德と云ふものは人道の理想として申しますと、人類全體の幸福に適ふやう、人類共通の道德を指したので

あります。所が實際に就て社會と云ふものを考へて見ますと、此人類全體を二纏めにするに云ふことが世界には理想として度々企てられた譯であります。其大いなるものは例へば基督教である。有らゆる國家の境界を離れて諸々の世界の人類を一纏めにして一個の世界的基督教國を作り出さうと云ふのが基督教の理想である。西洋の中世紀の基督教全盛の時代には大分此の理想に近いたけれども全世界の人類を残らず網羅するとは出来なかつた。此理想は今日までまだ實現されて居ない。又古來の英雄が世界統一を企てたのも人類統一の計畫と見て善からう。人類全體を統一した社會と云ふものは今日迄まだ出来上つて居らぬのであります。併し今日社會の種々の形式に就きまして最も進んだものは、何か先に申しましたやうな意味で、社會組織が最も完全に行つて居るのは何であるか。即ち分業と統一即ち

分化と協同の上から考へて見ると、此人間全體を一の社會に纏めた社會は現在にはない。現在存在する社會で今のやうな形式を備へて居るもの即ち人間が集つた所の共同生活で一番完全に近いたもの——完全とは言へないが、一番進んだ所の組織を有つて居る社會は何んであると言へばつまり國家であります。今日の所では國家の他に之を求むることは出来ぬ。さう云ふやうに考へて見まして、個人の目的を達する上から考へましても、或は社會が此目的を達する上から考へても、最も有効に目的を達する組織を有するものは國家である。一體道徳と云ふものは、個人の目的たる幸福及社會の目的たる人類全體の幸福を得しむるものであるやうに申しましたが、其道徳が一番能く行はれることが出来る場所は、如何なる社會であると言へば今日の所は國家であると言はねばならぬ。國家と云ふものがそれではどうして最

も善いか、若し國家がなかつたらどうであるかと考へると、現代に於て國家がなかつたら個人は自分の目的を能く達することは出来ぬ。例へば先刻のやうに極卑近なることを申しますれば、自分が教育を受けると云ふことでも、最も有効に教育を受けようと云ふことならば、國家と言ふ組織の内に生活せねばならぬ。其他の事業を爲すにしても、國家の組織がなければ何事も安全に行ふことは困難である。國家は唯組織統一が旨く行つて居ると云ふだけでなしに、國語とか或は風俗習慣、思想と云ふものが大體に統一して居る。それが個人の目的を達するに最も都合が好いのであります。さう云ふことになりましたと、例へば日本に生れた人であつて、其人が最も善く自分の目的を達しようとするれば、日本の國家の内に居つてさうしてやつて往くのが一番適切であり、有効であります。是は細かく申しますと幾らもおりますが、それ

位にして置きます。さうすると道德と國家の關係について一言せねばならぬ。無論道德は國家から與へられるものであると云ふ風に極端に論ずる必要はないが、今日の社會では國家の組織無しに道德が満足に行はれるものでない。若し國家の獨立がなくなつて仕舞へば恣に敵國に蹂躪せられて個人は道德を行はうとしても十分行ふことは出来ない。吾々が實際出會つて居る最も著しい例を申しましたならば、是は殆ど人道の上から申すに忍びないやうなことであります。例へば白耳義が獨逸に占領されて多數の獨逸の兵隊が這入つて幾多の婦人の貞操を蹂躪したと云ふことである。さう云ふのは婦人の方の側に於ては如何にもして自分の貞節を守らうとするのであります。けれども、國家の保障がない爲に自分の貞操を蹂躪される。それは國家の力が弱くて道德を行ふ保證をする事が出来ぬ爲である。露西亞の

動亂の際に行はれたあらゆる非道横暴に就いても同様に考ふることが出来る。個人の生命名譽財産等を保證し社會の秩序を維持する國家の力と云ふものがないから、さう云ふ風に個人が道德を行ふことが出来得ざるやうになつたものである。而も國家が大變弱るとか或は全く滅びると云ふことになりますと、個人は悉く其犠牲になつて仕舞はねばならぬ。或は人に依りまして國家主義は根本から全然個人主義と衝突するものである。個人を無視するのが國家主義の本領であると云ふやうに考へる人が往々にしてあるやうであります。此考は私は極めて舊式な極端に走つた國家主義ならば大に間違つて居ると思ふ。先刻個人と社會との有機的關係に就いて申しました事は大體に於て之を其儘個人と國家との關係に移して言ふことが出来る。國家は社會の

一つの形式に外ならぬ。個人と國家との關係は即ち有機的で通俗に言へば相持ちである。國家は如何なることを爲すにも、個人と國家との有機的關係を無視することは出来ない、個人も亦同様に己の爲す事は何でも直接間接に國家に關する事を忘れてはならぬ。國家が強いこと、即ち國家が進むと云ふことは、一人一人の個人が善くなければ決して強くならぬ。國家の中に不健全な個人があつて國家全體の力を害ふことは宛も身體の一部に故障があつて其影響が全身の健康に及ぶのと同様である。個人の發達は國家の鞏固なる所以である、それで個人を強くせず、個人に基礎を置かずして、國家ばかり強くなると云ふことは是は到底企つべからざることである。それで個人の立場から考へても國家の立場から考へても大體に於ては個人の目的と國家の目的と調和一致して居る。其の根本に於ては個人と國家が非常に



矛盾することはない筈である。此兩者を斯くの如き關係に考ふれば、國家が目的を達するとしても、或は個人が目的を達するとしても、それに依て孰れも幸福を受くる事が出来る次第であります。でありますから、個人と國家と根本的に本質的に衝突するやうなことはない道理であります。或は國家の爲に盡すことが個人の不利益と計り思はれたり又個人と國家と反對するやうな場合が生ずるやうに考へられるのは一は國家と個人との關係の道理が不徹底である爲に本質に於て衝突で無い事が衝突に見ゆること少く無い。是は皮相の見解から來るので固より取るに足らぬ。併し此二者の衝突は一方には國家の組織が不完全なる爲めに國家の目的と個人の目的との調和が不十分であり又個人が幼稚なる爲にまだ十分に其爲すべき所を理會せぬと云ふことに歸着するのであります。國家の組織統一は完全であればあ

る程全體と個人との目的が調和一致するけれども其組織に弱點があれば相互の衝突を來すことが多く出來て來る。個人と團體との關係に於ては兩者の目的は必ず調和すべきもので、國家の基礎は必ず個人の發達に置かなければならぬからして國家は個人を無視し又は全然之を犠牲にすることのみを本領とすべからざるのみならず眞に國家の目的を達するには個人を尊重し個性の發展を期せなければならぬと思ふ。今日の進歩したる社會には分業が複雑になつて個人のする事が皆色々の方面で、精神界とか或は物質界とかに分れて多趣多様になつて居る。人には天性各々長所と云ふものがありました、自己の價値を發揮せんとするには各々長じたる所に向つて進んで行く、今日の分業の制度では斯の如く各人がその長所を以て分業上業の任務を引受くるやうになれば一層よく其目的を達し其全體を綜合した結果が

國家の發達となり、詰り國家の力が充實するに違ひない。野蠻の時代には仕事が無純であるから分業が發達せぬ。従つて個人とする事が誰も似たやうな事計りで個性を發揮する必要が少い。併し今日の分業の社會では個人個人が同じ事ばかりするのでなく、適材を適所に置いて各個人に各自最も有效なる働をなさしめねばならぬ。今日能く言はれる個性尊重と云ふことが即ち是である。國家主義は個人を無視し、個性を無視し、人格を無視すると云ふことでは決して徹底するものでない。之に反して大いに此等を尊重して、個人が各々長所を伸べて、人格を高尙にして行くと云ふことに依て、今日の組織的社會と云ふものが最も有効に働いて行き、國家主義が真正の目的を達するものと信するのであります。

今西洋の歴史の上から考へますと云ふと國家主義の變遷には大に

吾々の参考になる事がある。古代希臘とか羅馬とかは随分極端な國家主義で國家の爲に個人を犠牲とする事は當然と考へられて居た。羅馬帝國瓦解の後歐洲の社會を風靡した基督教は博愛の人道を根本として人格の觀念や道德の思想を高尙にしたが其教は國家の區別なく國家主義の要素なく純然たる人道主義の個人主義であつた。近世になつて個人主義は色々の意味で發達したが遂に個人主義を基礎とした國家主義が興つて來た。獨逸人は本來哲學的で研究好きで哲學の大家カント、ヘーゲル、フイヒテ、シエリング等は勿論ゲーテ、シルレルの如き文豪を出した時代には只管人道の思想に懐れて、割合に國家の事は度外視されて居つて、主として世界的人類の理想的方面に向いて進んだのであります。獨逸は一時理想の夢を貪り過ぎた所から十九世紀の劈頭に思はぬ邊から痛棒を喰はされたのである。獨逸が最

近になつて大いに勃興して來たと云ふものは、詰り十八世紀に於て餘り高遠なる理想に走つて現實の國家と云ふことを十分に考へなかつた。餘り哲學文學に耽り過ぎて終に國家の存立を危うした。それがナポレオンの時に方つて獨逸人が眼を覺して、教育の上に於て、或は政治の上に於て、其他社會の實際の生活の上に於て、國家を盛んにすると云ふ思想を根柢としなければならぬと云ふ考が強くなつた。是が即ち國家主義であります。獨逸の國家主義は人道主義や哲學の弊を自覺して起つたものと見ることが出来るけれ共能く其根柢を研究すれば矢張獨逸固有の哲學を基礎として居るのである。此説明は長くなるから省く。とも角も今日のやうな國家は、殊に最近のやうに非常に國際間の競争が激甚になりますと、苟も世界の中に國家の獨立を保つて行くには到底其存立の基礎となるべき國家主義の上に立たねばな

らぬ。國家主義なくして國家の獨立は保たれぬ。どうしても先づ國家の獨立を先きにしなければ、個人の人格や道德の修養にしても或は行ふことを妨げられると云ふことになつて仕舞ふと云ふのである。それで國家主義より徳目を分類致します時には、國家に對する所の務と云ふものを一番先きに持つて來ねばならぬ事になる。即ち人類全體を先きにするか、國家と言ふ團體を先きにするかと云ふことに就て問題は實踐道德上重大な問題であつて其解決如何が人道主義と國家主義との別る所となるのである。國家を度外視すれば道德は勿論人道主義とならねばならぬ。併し國家を以て今日現存する最上の社會とすれば國家主義とならねばならぬ。今までの歴史上或時代は人類全體の方を先きにしたことがある。歐羅巴の中世紀基督教全盛の時代や獨逸では十八世紀の哲學全盛の時代である。併し現代のやう

な國民生活に於ては少くとも國家と云ふ立場から申しましても、實踐道德の上からしても國家を先きにし、國家主義を採らねばならぬ。さうして人道は國家の次に來なければならぬ様になる。左様に考へますれば高尚なる人道を餘りに軽く見過ぎて人間の理性の要求から國家主義の道德は人道と矛盾しはしないかと云ふとの問題が起つて來るのであります。是は能く學者の間に論ぜられるので、國家主義を餘り強く高唱すると、人道と矛盾するやうに見ゆるとが多くなつて來る。事實上國家主義が極端に走つて正義人道を無視する事も生じて來る。之が爲に國家主義其物に對して色々の非難が唱へらるのである、是は無論大變大切な點でありますが、併し國家主義と人道主義と相矛盾したやうに考へるのは私は考へる根本が違つて居ると思ふ。勿論國と國との關係に於ては戰爭の如く人道の教と相反したことをせねばな

らぬ事があるが是は除外例であつて本體では無い。國際關係の本體は人道を基とせねばならぬ。國の内部に於ては勿論同様である。先刻申しましたやうに、道德は本來人と人との間に生じたもので、而かも之を發生的に考ふれば親子骨肉の間に發生した時が最も純潔高尚であると思ひます。此道德の範圍を段々擴張して一般に及ぼして人類全體に一樣に行はうと言ふのが人道の理想である。デありますからして、社會の小さい範圍に於て善と稱すべき行爲は之を一層廣い範圍に行うても同様に善であるのが本體であると思ふ。道德の行はるゝ最大の範圍が社會全體即ち人類全體で之が人道の行はるべき理想の範圍である。例へば家庭間にはどんなことが善い行爲であるかと云へば、家庭の安寧、幸福を來すものである。即ち家族を一社會と見れば家族全體の幸福が家族の各員の行爲の終局の目的となつたときに

其行爲は家族に對して善である。若し假りに人間が家族だけあつて外部の關係がまだ開けない時には、僅かに家族だけに行はれて居つたものと見ねばならぬ。此家族道德は、家族限りに於て人道である。其が段々廣がつて國家と云ふ範圍に就いて考へたならば國家の範圍内に於ける人道がなければならぬ。是が即ち國民道德である。其上にもう一つ擴張して各國家全體を合せたのが人類全體の社會で人道が最も理想的に行はるる範圍である。是が所謂人道である。此等は皆道德の行はるる範圍の遠いで其本質に於ては家族道德でも國民道德でも人道でも根本的に異なるべき筈は無いのである。人道は元々家族と言ふ社會の形に發生し國家と云ふ形に於て行はれ遂に人類共通の道德思想に進んだのであります。而も道德の根本は國家と云ふ社會に行ふのも、家族と云ふ社會に行ふのも、或はもつと廣く人類全體に及

ばすのも同じものでなければならぬ。段々さう云ふ風に考へますと此等は決して根本的に相矛盾すべきものでない。唯だ今日國家に於ける國民生活は人類全體の目的と云ふものを以て直に國家の目的とし難い。詰り理想として人類全體が最も能く目的を達するやうに努むることは昔も今も變つた事は無い。併し此目的を達する最も安全の途は國家を無視すると言ふことで無くして國家と言ふ形によつて出来る丈け其理想を行ふより外は無いと思ふ。人間が共同の生活によつて共同の目的を達して往かうと云ふ社會組織は、國家に於て一番善く完成して居る。それで個人は國家と言ふ形に於て國民として始めて其生存を完うするものである。若し國家が潰れたならば個人の運命は極めて不安定のものであります。それであるからして、國民としての實踐道德の主義は國家主義でなければならぬと私は信ずる。

斯様に論ずれば此國家主義は人道と矛盾するでは無いかと反駁する人があらう。國家主義と人道主義とは根本から相矛盾するやうに考へて居る人があるやうであるけれども是は極めて舊式の考へ方である。舊式の國家主義即ち鎖國的の國家主義から言へば國家主義と人道主義とは相矛盾するやうに見えるのである。是は畢竟自分の國家の利益と、餘所の國家の利益と何時も相矛盾するものと考へるから起るのである。丁度田螺や蝶螺が自分の貝の中に引込んで仕舞つて他の物は寄せ着けないと云ふやうに國家を考へますと、今の國家主義と人道主義と矛盾するけれども、今日の文明國の國際關係は極めて親密なもので決してさう云うものでない。一體如何なる國家であつても、今日では單獨に孤立して蝶螺や田螺が貝の中に這入つて居るやうな工合では發達は出来ない。國際聯盟が成立して列國共同して世界の

平和を維持し人類全體の幸福の増進に協力しようと言ふ今日では尙更そうである。少なくとも今日の文明の國家はさうであります。凡そ文化と言ふものは大きく考ふれば本來人類共同の努力によつて出來又漸次發達進歩して行くものである。唯今の生活状態の上から考へ、衣食住の上から考へ、一方に食物なり、或は着物の上から考へましても、道德の上から考へても、宗教から考へましても、國と國とを比べましても、大概彼我文明を交換して非常に複雑なる關係に依て互に相倚り相扶けて今日の文明を爲して來た次第である。今日問題とします所の道德の上から考へてもさうであります。現代日本の道德思想の中には、支那の思想や印度の思想は勿論西洋思想が多く這入つて來て居るのであります。我國民の思想は外國の思想の影響を受けて著しく變はりつゝある。其の他の方面に於ても東西互に文化の交換に依て

段段進みつゝある。學術の方から申しましても例へば電燈に就いて申せば、是は本と英吉利人の發明であるけれども英吉利が獨りで占有して他國に其使用を禁じて居ると云ふ譯ではない。今日は世界の人類が均しく文明の恩惠を受けて居るのである。さう云ふ工合であるから一つの國が全然他國と絶縁し之と全然利益を異にして孤立するとか、鎖國的にやつて行くと云ふことが、其國の利益であると云ふ譯ではない。人類全體として考へて見れば文化の進歩は結局自分の國の利益であり又他の國の利益であつて、相矛盾するものではない。國家は相協同して廣く人類全體の進歩幸福を圖るやうにしなければ國家主義は徹底せぬ。つまり人道主義と調和しなければ國家主義は思ふやうに行かぬ。他の國の利益となるものは皆自分の國の不利益となるやうに考へるのは偏狹な國家主義である、本當の理想的國家主義と

云ふものは他の國と相協同せねばならぬ。丁度今日までの國家が發達したのは、互に相倚り相扶けて文明を彼我交換して進んで來たと同じ方法に依て將來も進んで行かねばならぬと思ふ。之が本當に國家の發達して行く所以であると考へます。さう云ふやうに考へますと所謂人類全體の進歩即ち、人類全體の幸福と言ふ人道の大目的を國家主義の中に取込んで入れて置かなければ國家主義は完全で無い。國家主義は人道主義を包容して始めて其國家が發展することが出来るのである。國家主義と人道主義は斯様に調和することが出来るもので決して相矛盾するものではない。それで人道と國民道德とは根柢に於ては同じものでありますけれども、其行はるる範圍は同一で無い。人道主義は國家の區別を顧みず只管人類全體の幸福を圖る。國家主義も固より一面に於て出来る限り人類全體の幸福を圖らなければな

らぬけれども國家としては唯だ何を先きにするかと云ふことに於て國家を先きにしなければ其存立は出来ぬ。それで唯今申しました通り、詰り今日の國民生活の實踐道德では國家が先きになつて人類全體と云ふものはそれに添えて行くと云ふ事になるのであります。それで國民道德では國家を一番先きに置かなければならぬ。

#### 六、我國民道德の特色

以上國民道德に就いて述べた事は何所の國家に就て云つても同じことでもあります。此等は唯國家として又國民として一般に申しますと同じことであるけれども、之を特別の一の國に就て申しますと云ふと其國に依て事情の違ひがありますからして、そこをもつと具體的にせねばなりません。國民道德は國々で夫々、違ふと云ふことが現は

れて來ねばなりません。國家の要求と云ふ者には國々の事情の違ひがそこに這入つて來る。最初申しましたやうに、道德と云ふものは客觀的事實として考へて行きますと、人類生活の形式であります。其内容を申しますと云ふと、それは人類の生活其自身であります。即ち人間の經驗であります。人類が次第に經驗を積上げて道德の形式が進歩するのであります。今少し具體的に考へて例へば忠君と言ふ道德を國民生活の形式と見ますれば其内容と言へば如何なる行爲によつて忠君をするかと言ふ事になります。忠君の内容となるべき行爲が即ち國民の生活其れ自身であります。假令忠君と言ふ道德の概念は同一であつたとしても具體的の忠君の行爲は國々によつて其趣が違はねばならぬ。夫れは結局國民生活の内容は國々の事情によつて異なるからであると思ふ。詰り國民の行つた所の道德の内容はどうし



て分かるかと申しますと、これは即ち國民生活の歴史であります。即ち國民が今まで行つて來た過去の國民道德は形式内容共に活きた歴史に表はれて居るのであります。國民生活の歴史は取りも直さず國民道德の歴史的事實であります。國民道德は國民生活中に包含せられて居るものとも見られるし又民族生活の歴史の産物であるとも考ふることが出来る。とも角我國現在今までの國民道德はどうして出來たかと云ふことは、詰り今日までの日本民族の歴史と云ふものが之を證明して居るのであります。さて我邦國民道德の發達に就ては既に諸先輩が澤山意見を述べてありますから、茲には國民道德發達の歴史は詳細に述べませぬ。併し我國の國民道德にはどう云ふ所に特色があるかと言ふ事を一言申上げて見やうと思ひます。此點も最早諸先輩によりて言ひ盡されたことでもありますから、それに就いて私の考

へを附加へて申し度いと思ひます。日本の道德はどうして生じたかと言へば、是は申すまでもなく、其一は大和民族本有の特色が本であります。天賦の性として有つて居る民族の特色が根本となりまして日本と云ふ特別の國土に於て營んだ民族生活の上に特色が現はれて我國民道德となつたのである。私の考ふる所によれば凡そ國家を成して生活する國民には孰れも國家主義の國民道德が無ければならぬ。假令表面に標榜する主義や名稱は異なつて居つても何か國家的生活を維持する基本的の道德がなければならぬ。而して日本の國家主義の特色は詰り皇室中心の國家主義と云ふことになると思ふ。更に詳しく言へば忠孝を一本と考へ忠君と愛國とを一體として考ふる所の國家主義である。忠。孝。愛國と云ふ三つの違つた概念を全然一致して考ふるのである。日本國民は皇室と始終を共にするので皇室と

國家とを同一體と見做すのである。是は丁度基督教の三位一體の様な工合で、三つを一つに考ふる所に特色があると思ふ。例へば愛國だけ一つ離して考へますと、是は何所の國へ行つてもある。愛國は何所の國も共通である。けれども忠君と愛國とを全然同一の事柄と考ふのは我國民道德の特色と言つて宜しい。愛國の考へは外國人と大差が無いとしても我國の忠君の思想は外國人の考へ及ばぬ廣大の意味を持つて居つて結局愛國の思想と全然一致して仕舞ふのである。忠國と愛國と全然一致すると言ふことが十分に理會の出來ぬ人は忠君の解釋が偏狹に失して居るからである。更に進んで之を考へて見れば此特色は如何にして生じたか、何故に日本では忠君と愛國とが一緒にならねばならぬかと言ふことは昔の人が理論的に研究して理窟攻で作り出したのでは無くして是は先刻申しましたやうに我民族生活

の歴史の自然の産物であります。大和民族は皇室を中心として家族的に發達した血族團體であるから最も自然に此思想が養はれたのである。實社會の活きた道德は多く理論で造り上げられるものでない。併し後に色々之を理論的に説明すれば幾らでも説明し且理窟を附ける途がある。我邦の國民道德の特色は結局大和民族生活の歴史の産物であつて民族の特色即ち國民性が其本となつて居ると考へます。けれども其本質に於ては人間自然の性に適つた所言換へすれば人類共通の人道を基礎として居ることを一言し度いのである。忠孝一本並に忠君愛國の一致と言へば他國に餘り無い事で非常に事變つたやうであるが、實は人類に共通な人道が日本と云ふ特別の民族生活に適合して行はれ來つたのであります。先づ日本では忠の本は孝にあると申します。此方から説明して見たい。先刻一寸人道の淵源は親と

子との間に生ずる自然純潔の至情にあると申しましたが、是が進めば親が子に對して表はす道德となるのであります。今親子の上下の關係を逆に考へますれば即ち子が親に對する關係となり其間に子が親に對して持つ自然の純潔なる至情があることは誰も疑ふ可らざる事實である。此至情を本として進んだのが子が親に對する道德即ち我邦の忠の本となる孝であります。孝はつまり子が親に對して表はす本能を基礎として自然に發達したものであると信ずる。孝は決して外から膏藥を貼付けたやうな道德ではない。人間が本能として誰も教へぬ先から持つて居る萌芽が段々發達したのである。子供の生れてから成人致しますまでに至る親の苦勞は口に言はれないのであります。子供は親の無限の愛によらねば到底育つことの出来ぬものであるから生れた子は本能的に親を慕ひ親に頼るのであります。少し

大きくなりましたしてから、人の顔が分るやうになりましたから餘所の人が抱かうとすると泣出しても本當の母親が抱けば泣き止むでスヤ／＼母の懷ろに眠る。斯う云ふ風に一方の母親が子に現はす利他的即ち犠牲的動作が、子供に及ぼす自然の感應として子が本能的に自然親に頼り、親を思ふ情性を自然に備へるやうになり、それで段々／＼子供が大きくなつて行きます。さうして子が親に對して表はす所の情が段段向上發達して之を理想化したるものが孝の理想であると思ふ。一方に親が子に對すれば親の慈愛と云ひ子が親に對すれば孝と云ふのである。人類を段々發生的に考へると此二つは根柢が同じことで、唯だ見方が變つて居る計りである。母親の子に對する無限の慈愛も子が親に對する孝も共に本能から出發して自然に發達したものである、斯う述べて行くと子供の孝と言ふ徳を涵養して行くことは丁度何か

植物の種子を蒔いて置けば自然に發芽し段々旨く水をやつて培養して行きますと自然に成長すると餘程似たものであります。折角種子を蒔いて發芽しても碌に水もやらず世話もせず又は芽が出てもそれを手でむしつたならば如何なる植物も育つ見込が無い。夫れ程で無くとも手入が届かねば發達を妨げらるゝと同じ事で親の子に對する情が圓滿でありませれば子の孝の徳も自然に發達するであらうと思ふ。親の慈愛は子の孝に先つて發達するものであるから親の子に對する取扱の如何は孝の發達の上に大關係を有するのである。さて親の子に對して表はす所の利他、即ち犠牲の情は子に對しては孝を助長するのであるが若し此精神を子のみ止めず廣く人生に及ぼしたならば如何であらう。私の考へでは人道の理想は取りも直さず母が子に對する情を人類全體に擴張したものであると信するのである。子

は親の愛によつて幸福なるが如く人類全體は相互の愛によつて平和を來し幸福を來さねばならぬと思ふ。人類全體の幸福は實に人類共通の要求で之がやがて人道の目的であると思ふ。而して孝は親の慈愛の片相手で其本質に於て共通でありますから、支那でも孝は百行の本なりと申しました。孝の精神を以て百事を行へば道に適ふと言ふ意味であると思ふ。さて孝は親に對する丈の個人關係であります。孝に表はれる徳性を推擴げますと如何なる所に行つても到る所に可ならざる所はない。即ち古今に通じて謬らず東西に施して悖らない所の立派なる人道であると思ふ。日本の忠の考へは、義は君臣の如く情は父子の如しと云ふ勅語の中にあります通り、此孝の考へを移したのであると信じます。さう云ふやうに考へますれば、忠を全うすると云ふことは孝を完うすると同じく、即ち早く申しますと人道を完うす

ることになる。人道を完うしなかつたならば忠を完うし、孝を完うすることは出来ない。詰り孝も忠も人道の發現である。さうして而も其因て起る所は人間の本性に基いて最も自然の發達である。忠君愛國の一致に就ても同様に考ふことが出来る。ちよつと愛國だけ考へますと、大變個人が國に對して犠牲になることばかりのやうに聞えますけれども、能く其意味を理會すれば愛國がやがて個人の生存に必要な事である事が自分から分つて来る。自分の考では愛國は母が自分の生んだ子に對して犠牲を拂ふと同一の根柢に出でたものであると思ふ。一體此前に親が子を育てる時には自から犠牲の精神が現はれて自分の利益を子に分ち、甚しきは自分の命を捨て、も子の生存を完うせしめやうと云ふ情がある。母親に此犠牲の精神があるので生れた弱い子が育ち人類の種がつかいて行く。此世に母親の犠牲的精

神と云ふものが無かつたとすれば、人間の種子は切れて仕舞ひます。母親が其神聖なる義務を盡すことに依て其子が育つて行き、さうして人類が代々續いて行く。つまり親の本能で人類が續いて行くのである。親子の間に自然の本能があるので、親子の道が出来て子も親も幸福を得る。親が子を愛し子が親に孝を盡すと云ふ自然の人道を推擡げて之を家族に及ぼして家族全體の幸福を圖らうと云ふ所から家族道德が起つて來たものである。家族道德は骨肉間の自然の情から起つて、家族全體の幸福を圖り其存續を圖つて行く。此の如く人間の自然の情に出でたるものを、段々もう少し推擡げ國家まで擡げて行けばそれが即ち愛國心になるのである。愛國心は民族全體の存續と幸福を目的とするのである。丁度元と母が子の生存を圖り家族が互に家族の存續を圖り幸福を圖ると同一の精神でそれが段々擴張したものと

に相違ない。愛國心は種族保存の本能の發達したものである。是が我邦の國民道德の特色として忠孝一本、忠君愛國を皆一緒にすることが凡て人道を基礎として居ると言ふ私の説明の概略である。而して我國民道德を徹底すれば人道を完うする所以であると言ふ理論の根據である。又我邦に斯の如き國民道德が發達した事は人間の本能の上から考察して見れば極めて自然であつて毫も不思議は無い。詰り日本の國家は同族の血族團體として皇室を中心として發達して参りました。それで皇室を中心として發達して居りますから、皇室の歴史は同時に國家の歴史である。故に日本の將來も此大方針を以て進歩發展して行くのが自然の勢でなければならぬ。日本の國家の存立の基礎となるべき國民道德の特色は元を申すと人間自然の情に基いたもので、此日本の國民道德の最も大切なる所を完全に行うて行くには、詰

り人間の有つて居る所の天賦の徳性を發揮して同時に人道を最も能く現はすことになるのである。そこが詰り教育に關する勅語の中に之を古今に通じて謬らず之を東西に施して悖らずと宣うたる御言葉の御精神であると拜察する。人道は我々が能く日本の國民道德を完うする精神である。此精神は人類に共通なるものである。さう云ふ考へから私は人道と矛盾した所の國民道德が有り得るとは考へられぬ。世間には國家主義は人道を壓迫するなど攻撃しますが、徹底した國家主義には決して斯る矛盾は無い。攻撃を受くるやうな國家主義は狹隘な鎖國的なものか然らざれば其主義が謬つたものである。假へば攘夷を尊王の手段であると考へるやうなのは偏狹なる鎖國主義の國家主義である。左様に段々考へて参りますと、此國民道德の最も大事なる部分は詰り人道と一致することが分る。詰り我國民道德

は日本人と言ふ特殊の民族が行ふ人道であると言ふのが私の所信である。我々日本人の國民道德が日本人の行ふべき道德の一番の首位を占めると云ふことは今日最も當然なことであると思ふ。

それから先刻申しました國民の要求の前に時代の要求と云ふことを申し上げましたが、國家の要求は時代の要求を合せて始めて國民道德が具體的に進んで行くものである。本來人類の社會は進化の大法則によつて間斷なく進歩する。さうすると國民道德も矢張り時勢の進歩に伴つて發達すべきものであると私は考へる。若し之をさうとしなければ、現在國民道德と云ふものは既に完成したものと云はねばならぬ。私のやうに國民道德を解すれば日本の道德は將來大に進歩せねばならぬ。國民道德は歴史に表はれた過去のものが理想的であるとするのは恐らく是は保守的に過ると私は考へる。それから又所謂

忠君愛國と云ふ言葉も、是は最も概括的でありますが、唯だ夫れが聲計りに止まり或は感情計りであり或は所謂忠君愛國の精神だけであつて其内容が空虚であり之を實行する方法が伴つて居なかつたならば所謂形式道德に止つて眞正の道德の價値はないと思ふ。忠君愛國の大切な事は様々に申されますが更に進んでどうして忠君となり愛國となるかと言ふ實行の方法が示され無いのは大なる缺點と思ひます。昔も今も同じ様に忠君愛國は我國民道德の眼目であります。鎖國時代には尊王は攘夷となつて居るけれども、それは今日から言へば時勢に遅れて居ると言はねばならぬ。忠君愛國の精神は、今日も昔も變りはありませんが、之を實際實現する實行の内容は時勢に應じて變つて行かねばならぬ。一言にして言へば忠君愛國の精神は同一としても其内容は時勢と共に進歩し充實して行かねばならぬ。今日は分業の

社會でありますから分業の一部を擔任する個人が其任務の責任を重んずることが非常に大事である。此點に於ては我國民はもう少ししつかりしなければならぬ。さう云ふ點が將來大いに進歩しなければならぬと私は信ずる、之が忠君愛國の精神の内容を充實するのであると思ふ。さう云ふ國民の行ふ道德問題が社會の進歩に連れて起つて來るのは無理でない。道德の内容は社會の事情に依て變はる必要がある。例へば政體の變つたと云ふことに就ても同様、唯今は立憲政體であります、が今の立憲政體と徳川時代の政治とは御存じの通り大變違ふ。忠君愛國の精神は同じでも、さう云ふ政體に於て忠君愛國の精神を貫徹する途は餘程違はなければならぬ。さう云ふ工合にして私は國民道德と云ふものは段々時代と共に進んで行かなければならぬと認めるのであります。我國民道德は日本人の行ふ人道で其根本に

於ては人類共通の要求に出でたものであるけれども、其形は國家の要求と時勢の要求とに適はなければならぬ。道德に人道と國民道德と時代道德の三通りあるのでは無い。詰り國民道德と云ふ一の道德の中で以上三の要求を併せたものである。即ち人道を基礎として、國家時代の要求を加味したものである。それが一つあれば日本人が行ひ得る道德は完い譯である。純粹の理論から云へば人類全體に對して人道を以て最高の道德とするのであります。世界が人類全體を包容した組織完全の一の社會となつた時こそ其理想が行はるゝ筈であるけれども、今日は不可能である。今日は國家の形を中心として國民と云ふさう云ふ資格に於て、國民道德と云ふ形に依て人道を行はなければならぬのである。國民道德の中に人道の理想を出來得る限り實現するのである。國民道德には日本人の行ふべき全部の道德が皆包含



される。詰り我々は日本人と云ふ資格に於て、國民道德を行つて人道即ち人間の人間たる所以を發揮することが出来ると思へます。現代の人類は民族的團結によつて生活して居るのであるから人類共通の最高理想たる人道の實現即ち人類全體の發達によりて人類全體の幸福の増進を圖らんとするには先づ各國民が夫れ々、人道の實現を理想として民族の向上發展を圖らねばならぬ。是が私が以上述べたる人道的國家主義の國民道德の本領である。此意義の國民道德は人道の理想を現代に於て最大限に實現せんとする最良の途であると思ふ。私は斯様にして人道と國民道德とを融合調和し度いのである。要するに我國民道德の振興は私に取つては日本人によれる人道の實現と同意義に歸着するのである。

### 七、國民道德に關する誤解

日清日露戦役の後には我國の地位は俄かに高まり戦勝否國民發展の眞因と證明された國民道德は非常なる誇を以て鼓吹せられた。然るに歐洲大戰後には誰も表面に立つて國民道德の攻撃をする者は無いが新進の名士で本氣に身を入れて斯道の爲に盡さうと言ふ人が少くなり世の壯年や青年の人が比較的此方面に興味を持たぬやうな傾向を生じた事は争はれぬ裏面の事實であると思ふ。是は一寸著しくは目に見えぬ事柄であるけれども民族の將來を考ふるものは深く立入つて注意をせねばならぬことである。最近のこと目下青年の崇拜の中心となつて居る或る知名の新思想家が或る地方に講演に行つた所が待ち構へて居たやからが押しかけて來て開會前に満場立錐の

餘地なしと言ふ所では無く人波は講堂に溢れて廊下は勿論のこと屋外の窓側までも聴衆が殺到すると言ふ盛況を呈した。然るに數日を経て國民道徳を鼓吹する某會の講演會が同一の市で而も同一の會場で開かれた。講師は我邦第一流の嚴めしい學者であつたに拘らず聴衆がトント集まらぬ。あちらこちらに頼み廻はつて驅り集めた人が主催者を合せて僅かに五十餘人に過ぎなかつたとの事である。吾々は勿論此一事を以て我邦思想界の全體に推し及ばすことは出来ぬけれども青年及聴衆の概況を察することが出来ると思ふ。勿論國民道徳の講演會に出ぬからと言つて忠君愛國の念が缺けて居るとか新思想の講演會に出たから思想が不健全であるとか言ふのは速斷であるけれども世人が一般に時代思潮に動かされつゝあることは疑ふ可らざる傾向であると思ふ。私の考ふる所によれば此頃の青年が舊人物の

國民道徳論に耳を傾けぬやうになつた事は其論旨が古い型にはいつて仕舞つて居るからである。切言すれば小學校や中學校で學んだ趣旨と全く同一であるからであると思ふ。これは國民道徳に反對すると言ふ惡意から出でたものと考ふるよりは型にはまつた陳腐な國民道徳論ならば聞かぬでも結論は豫め分つて居ると言ふので更に進んで聞き直さうと言ふ興味が起つて來ないのであると考ふる方が事實に近いと思ふ。併し乍ら何時も同じ論旨を繰り返して國民道徳論を押賣して感奮興起せしめる所か青年を飽き飽きさせることは教育の上からも廣く國民生活の上からも大に考ふべき事柄である。今日青年は勿論世人一般に國民道徳に對して種々の不當なる誤解を抱いて居るのも此邊に原因が存して居るのでは無からうかと思はれるのである。國民道徳を鼓吹する人は此邊の事情を心得て居つて説き方を

考へないで下手をやれば振興の目的を達する事が出来ぬ計りで無く却つて誤解を増さしむる計りである。私の考ふる國民道徳は前に述べた通りで陳腐な型にはまつたもので無く時勢と共に進歩するものである。即ち

我國民生活に於ける最上の人道の實現であるから正統を踏んだ現代思潮の要求に符合するのである。私の考から言へば真正の國民道徳によらねば現代思潮の要求に應ずる生活は出来ぬのである。國民道徳は過去の祖先が實行して民族の發展を助けた如く現在將來も永遠に大和民族の道徳で無ければならぬのである。陳腐とか時代後れとか言べきものでなく時勢に先んじ時勢を率ゐて行くべきものである。固陋頑冥の保守主義で無く聰明豁達なる進歩主義である。直に民族の自覺を促して努力奮闘せしめんとするのである。然るに一部

の人は國民道徳は舊思想で既に時代に後れて居り是からの新時代を支配する思想は別種の時代思想でなければならぬと考へて居るやうである。是は全く國民道徳を或る時代に適する形が固定して動かぬものと考へる誤解から起つて居ると思ふ。國民道徳が其様に或る時代に適する形に固定して少しも動かす可らざるものと考ふれば恰も骨董品や名所舊跡見たやうなもので時代後れと考ふるのも無理の無い所もあると思ふ。國民道徳の根本精神は人道の精神が動かぬやうに動かぬものであり、又動かす可らざるものである。けれども時勢の推移に適應する部分が時代によつて變らねばならぬ事は少し思慮ある人は何人も同意せねばならぬ事であると思ふ。切言すれば我が國民道徳の大精神は古今を貫いて居るけれども現代には現代に適應した所がなければならぬ。少くとも世界の趨勢に順應した所がなければ

ばならぬ。若し然らざれば國民道德の根本精神に矛盾するのである。要するに國民道德は國家及國民の要求を最よく満足せしめ國民生活をして最善の域に進ましむる原動力でなければならぬ。前章で民族的自覺に就て述べた所を茲に移して考へ合すれば自から明瞭であると思ふ。無暗に新しがる人が國民道德の進歩の何たるを知らず猥りに舊思想呼ばはりや時代後れ呼ばはりをするのが誤解であると同様に舊思想に囚はれて昔の型を脱するとの出來ぬ老人連が新思想に對して正邪の區別も判斷せず一概に國民道德の敵の如く思ひ時勢の要求に應ずる國民道德の進歩を理會する能はず却つて之を其の衰微の如く考へ何時までも傳統的の思想を墨守しようとするのも國民道德の誤解であると思ふ。國民道德の思想を時勢の要求よりも古くなし過ぎて實際生活と沒交渉になして仕舞ふのは國民道德の遵奉に忠

實なやうに見えて却つて最負の引き倒しであると思ふ。私は國民道德は時勢の推移に鑑みて其説き方を考へて青年を感奮興起せしめ其根本精神を貫徹することに力を注ぐことが大切であると思ふ。換言すれば國民道德の思想の内容は時勢の進歩と共に進歩せねばならぬと思ふ。

國民道德はその名の示す如く國民全體の道德である。而も其道德は國民生活の中に包含されて居るもので國民生活以外に別に國民道德生活と言ふ特殊の生活があるのでは無い。日本人の生活には何處にも何時も國民道德が具はつて居るべき筈である。随つて日本人の生活は二六時中到る所之に則るべきものである。故に之を日常生活と離れた特殊の事柄のやうに説くのは誤りと言はねばならぬ。又國民道德は軍人や官吏や學校生徒や教員の特有の道德であるかの如く